紀伊國名所圖會 後編 六之巻

日高群

和書門
類 三六五五二
號 一二一
函 一三
架 六
冊

内閣文庫
和書
類 三六五五二
號 一二一
冊 六
函 一三
架

内閣文庫
番號 和 36552
冊數 6 (6)
函號 176 11

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

紀伊名所圖會後編巻之六

目錄

日高川 并図
岩内王子社
山田荘
塩屋浦 并図 古図
權現磯
上野荘
山卧塚 并山卧図
阿古根の浦
佛井戸 并図
印南驛 并図
土橋
日高潮
春日社
紀道明神社
塩屋王子祠
鰹島
灘
壁川橋
古錢
清姫腰掛石
印定寺
御所平
岩内荘
熊野權現社
蟹田山
王子川
産物沖牡蠣
袖戸
壁崎
上野
印南荘
正八幡宮
冨王子祠
石淵郷
聖德王子社 并図
熊野川
冨島
武塔天神社 并図
清姫草履塚
野島
上野王子祠
津井王子祠
印南川
大歳明神社

切目荘
大塔宮社
切尾渓（并御ぢ 絵図）
百王子塚
川又観音社（并図）
中山
結松（并図）
岩代原
岩代井
南部郷
南部峠
名石（并図）
南部川
切目五躰王子社（并全図 古図 信西故事）
御所屋敷
切目川
眞妻明神社
岩ぢさの圖
中山王子祠
岩代山
岩代王子祠
沖見茶屋
片倉峠（并図）
千里濱（并図）
目津崎
南部驛（并図）
熊野懐紙
切目山（并大塔宮故事図）
玉那木淵
岩代荘
岩代尾上
櫨川
岩代濱
八幡宮
ふくぶ餅
千里王子祠
千尋濱
勝専寺
那木
切目宿
新八幡宮
巖（并図）
光明寺
盤代岡
岩代野
岩代岸
南部荘
引木坂
産物珊瑚砂
御所原
三鍋王子祠

安養寺（并市 絵図）
超安寺
瓜渓
阿和惣大明神
鹿島（并図）
三名部浦
一ノ宮権現社
産物盆石
天寶明神社
産物海馬
異事
祇園御霊宮（并図）
南部川郷
笹峠
鹿嶋明神社
道祖神の事（并図）
野の邊氏城跡
轟の瀧（并図）
埴田梅林（并図）

○日高川（ひだかがわ）　紀伊国道二四番名原浦より小栖原浦枝ヶ丈四村へ流れ入て丈四浦
となる入る所を山地元大和小界内を四日市二郡の堺の山中より発し
紀州口より大和小堺の深き渓地を廿四里許と云ふ河又八里と云ふ者歟
紀伝を按ずるに和佐原浦和て清水入る九右ヶ枝流の湊合するもの指て数ふべし
多くは紀伝

草根集　ひとしれぬる日高川の氷やとけて氷と解く紀伊の旅人　正徹

同　たのめてもいつの日高川河浪小夕暮のそくもそれ雪書　同

道成寺縁起云　日高川といふ川中に大蛇出て此便和尚を流るねふ
水波しかれども今迫て来るくし宮て此和尚
をふらんとしをんもぞらん元堂くの物ふかとひけて
此僧へいそぐ迎けるもものごとく来て波せとけるもども
水波しかるとき波其時衣裳抜捨て大毒地と化して此門と
波をかけて水波をびちひらけしかして岩内ひらけれと日
紀あるを性ふんえくと

日高潮（ひだかしほ）　宇天紀ふ天くくり沼ちくれくと中州もくし此海口蛇迂波ふしくこけれべ姉くふ
我れ日書考代ふ海人湖字字くべし陳内ふ式と移波湖又万葉集と枝乃湖

日高川
渡頭
水寄久道
御仮屋

園八幡
瀬見善水

居名之湖是利波郡也他湖の字皆ミナトと訓めり万葉集注釈に引る阿波風土記の中湖具湖も亦同例なり又万葉集に潮見明且石之潮潮華又潮接延菖蒲を浦と訓て潮に作る又字鏡集に潮をミナツと訓るもミナトに中世後て刷ぬしるらん

霊異記云

紀伊国日高郡の海に紀弟麻呂といふ人ありけるとて網を結びて魚を捕るを業とし須同郡安諦郡今れを吉備郡と云

此人紀伊馬宮と海部郡浜中郷の人中臣連紀又麻呂と二人有俗郡に佛像を傭賃として年傭を交くるに此人吾家のとうとく二人を苦行駅使として網を引せ魚を捕らせけり其年六月六日天辛に風ふきつのりだちて海ふきたて湊に大なる川と下りて難波流に入り此人うれ二人を巻入ふきて流るに本を知らざりしかれば二人ともに此網に入て搔に編こともにうちあつまて結んと須るに多勢をもげしくして血縄絞て筏とけ離れ湊をとうく海に入しうべ名一本にさぐりて漂流し南と

二人を如何あともせんとすべなく唯南無三宝哀雅拝伏せしめるに尺迦年尼佛と称へて共叫びて息ざるし絶

あやうけむ祖父麻呂八日と絶く浜路に南西田町野浦に焼く人の住に住くよりて海に馬宮と浜に日に同にまよりて海にてからとを拾ひ出ぐしうに甚郷人等こも此に入て事由を問ひしに此の状を少知て驚き怪ひて当国司に申されば国司も出みて特に結ひてなぐさめ人を附て祖父麻呂歌していやう教生とさしむ人月捨ひて苦に交るを事に日高に彼又駅使もとく教生の業を止ざらんこと不留くして其に国分寺に信に法ひをとして馬宮と二月を経て郷に海

末に妻子にこれを又く面会ざりく絶く性しきていよ海に入て溺死せしきに伏して七

日と絶て永代をもつけ叛逆流不幸つゝ不思ひの
けなていろて敬うせのゝ人ちの変うの紀竟うと乳とぐれこる
岩屋奥不去りくれしと陳べられが妻子おわ忠こおおとび
うれらてこと日とうれこまうと馬去義んしこう
せを秘ひ山不入つて法を隠しそれが乱る人ゆく者
寺とせされとう〜海中不て親参しつくも参と今、
ト弘を存さるを宮不天迦丈森の城徳ゆして深流
れ人の源伝ゆり況叛もて〜見のやし況や叛生の叛とや

岩内荘 日高川の南岸不にう
ゑ巳ケ村をもぶ

石隅郷 和名抄不出ず今爰して後考ぶべし日高川の
南岸不岩内村にうと宮人ちの他ゆべし

岩内王子祠 岩内村にうと今世久志波王子と又比地河流変遷し
岩内王子社北國役して後世不社をこゝ遷り

春日社 同村不にうて境内度くして古八神四も
ゆ千にうしくと又社伝深ゆしうべ

十日略 渡河参イハウ千王子

熊野權現社 無村にうて多孔十一月
神名日一村の老古神をゆ

當社ゆ熊野大神を祀りて境内いと廣く社殿巳不分
ゆ古八十二社にうしくと後世巳社不合祀ていり 社家の伝不性
古八社し社発不神仏も名く祭日不ゆ奥年実祭四巳不後世ぜ〜と行の
ひしゆしうゆ者して今八川上元入野村大山桧沢て後佛まやつ 當社
第小川上元の大山桧沢ゆ兎蘆守護の神てゆ
有徳大君藩小味〜とゆ社八御立願にうて神田名十
二石づを寄附〜給ふ 往年境内不て村民一寸條の白玉二顆古境
二面大刀也刀法名掛ゆ戦場出〜るゆ
ゆ日神樂歌 寛文十年不出せられて
ゆれゆ子社宮の細石ゆ
ゆうべ車引とせう
ゆ子の喰はたこを おゆ〜
ゆ勢オ、おゆ〜ゆ世美吹上れでのゆむきく
東山ゆうゆれ宮小おゆれ出ず 地ゆしてゆ山て
義ゆちゆれゆさよ 美山や大喰抜小ゆれいでず

聖徳王子社

はち子路て佛典を尊崇し給ひしかを以て佛ヲ祀し太子堂を称する也いとあらう此神ヲ稱社と称するなり

そるれいで峰なる谷をわくる波もよ　秋日さしなり

日かてやく紅葉山ヲ、いづるもやこのくらんはもじれおいづるもじけそいつるもれくるもを　此佛おのもしまはさ

ゆるくれ出るの色葉をおもしろ

きて地もゆれくヲ、地もゆれく本もるびくちや

うれるまさよ　此佛おれを秋の行幸ヲ行るくとく

ヲ、をくそていさるる神もそもしまは波　あ佛おの

もしまは波さ紀を殘をたく殘をたく殘を

志きヲふもせう　紀伊國神宗殘ヲ水神のもしまは先ヲ殘くく

ふ　つくし紀の行るくはゆ行るヲ同

歯黒ものされて出てもくさ行う　やつくまるとえくて

申せども西を海ヲ、西を海東を清神前もしまは波

奪れ子をいづくら住ヲ丹生れ山ヲ、丹生れ山今抑り

みるおを耳ゆれ笑　くくたちを抑ゆるくらハ涼

山なるは添山なる大里小里もそこなる次　日高御子は
日高山からぞ拙しき次は拙しき旦は常級ときて
て今そかしき次

聖徳太子社　下部口村にあり　林の中にあり

山田庄　岩内庄の下流にありて九ケ村を統ぶ　元和古事の法にては日高川南に移りしかば名屋の一村は離れて川の南に属す　郡居是也

絶道明神社　川よりて北の御幸にありて名屋浦に属し　当社もとは川上庄二三百町の村々に祀りしが元和六年の洪水にも流をよせし此地の松樹にかかれるを村にて祀りしが其後の洪水にも浮流して其此松の松樹にかかれる子よりて村民不思議の思をなし松葉明神と崇め奉る　東岡村の武塔天神の氏下なりしが此村よりて当社をもて氏神とせしといへり

蟹田山　天田小塩屋二村の間にありて御幸記に出内王子をたねしあひて山を越て塩屋王子に詣づとあるは此山をさしていへるなり　是古の熊野街道なり　今も小栗街道といひ伝ふ　山上よりてうらむに郡中の諸庄眼下にありて川口日の御崎までの景色いはんかたなし　亀山古城跡の眺望を併す

○熊野川　源は熊野村よりて出る　天田浦　名の熊野街道に小橋を架す

○塩屋浦　王子川を隔てて南北二村にわかる　名寄に塩屋の浦焼塩の図を出して　口碑に塩屋とありといへれば　むかし海浜の村にて塩を焼きしなり　今は業を廃す　是を世に塩屋といひ伝へしか　王子川の橋よりて東に小高き塩竈の跡ありて是を塩竈の跡といへり

夫木抄
沖つ風塩屋の浦をみわたせばかつてもやらぬ夕煙かな　第三のみこ

哥枕名寄
おもひいむ塩屋の里に住む海人もからき思ひやすらふと　中務卿親王宗尊

くしかりし節
うしや今塩屋ときくもかなしからさる旅ちかなるやむすに　似雲

○塩屋王子祠　小塩屋村にありて王子川の傍にありて古人是人王子といへるもこれなり　後鳥羽院の御幸の時とも云々
塩屋王子　熊野九十九王子の一にして　一名ひしとも云ひしとぞ

御幸記云
十一日雨降申後聊休入夜月朧々也遅明出宿所不知御幸超山
参塩屋王子　此辺又勝地有祓　次入昼宿小食

千載集又続詞花集
白河院熊野へまゐらせ給ひける御供にて塩屋の王子の御前にて人々歌よみ侍りけるに
たちかへる塩屋の浦の…神の心とも…　後二条内大臣

新古今集
白河院熊野にまうで給ひける御供の人塩屋の王子にて歌よみ侍りけるに
立かへる塩屋の浦の煙…神の心とも…　徳大寺左大臣

鹽屋王子祠前碑　仁井田好古
鹽屋村在日高川之海口、昔時煮鹽為業因名焉今村分南

塩屋浦
塩屋王子社
権現礒

自然斧奇集
夫西ゆくと
きこゆるは
春の海
宗祇

帆の影の
夕日さやけき
海の秋
示叙

うらもあさて
やあれ塩屋の
うら人も
月ぞ煙や
いとひまて
久道姉

塩屋浦古圖

乃波ち孫起ゆく
ありて

北、其在北者山岡東来、西北臨日高川、山岡登纔數十磴、上平坦、而樹木翁欝、神廟在焉、稱鹽屋王子、一稱美人王子、羨人、稱古無所見、不知其所起、祠在山岡、可以遠眺望、故　聖駕幸於熊野、每為駐驛之處、　白河法皇之幸、公卿賦和歌於祠前、建仁元年　後鳥羽帝之幸、亦駐驛於此、御幸記所謂此處亦勝地是也、元弘之乱、大塔王避難遁于熊野、亦投宿于此蓋　二帝駐驛之後屋宇猶存也、今也屋宇皆廢、而草樹蒙密之中、遺址獨在焉、故土人呼曰御所芝、其地形東連山巒、西臨海畔、淡阿諸山、隱々乎蒼波杳渺之中、其北則衆嶺回擁、如半環、蒼翠凌虛、邐迤西走、其間一大海湾、若開鏡面、此古之地形也、數百年之久、砂土塡海、川流亦移、海湾變而沃野數里、村落鱗集、田疇區分、閎廓遠大、晻曖於雲烟之中、翠松一黛、彌漫乎海畔數里之間、山容水態、四時極其濃媚、花晨月夕、千歳同其奇觀、誠可謂一郡絶境矣、嗟乎人之居世、老幼異思、貴賤分趣、觀物之情、固不能同、登茲岡也二帝一王游豫跼蹐之蹤、依然猶存焉、則豈得無意哉、將追聖駕欣賞之跡、縱其心目、冤飛神怡、朗誦微吟、樂而忘歸邪、將承帝子於遺跡、欽其英風、烈流涕歔欷、猶有餘慨邪、又將達觀古今、視萬類、來滄之變、不入於心、悲觀之跡、不槩於懷、于々焉洋々焉、以遊思於物表耶、樹碑勒文、後之觀者其有所擇焉

天保四年癸巳九月

○王子川（ゴウジ）

王子祠の南の小橋を渡る此川は熊野川に流れ出て熊野川と合して日高川に注ぐ

富鳩（ふくはと）此地今絶多し民俗の除下ると云

人車記云

仁平二年四月十四日　畧　或人云今度御熊野詣毎事不吉　畧

又自御下向道御先達實賢法橋病脳富島御宿以後万死不

武ぶ塔とう天てん神じん社しゃ

国立公文書館
National Archives of Japan

覺雖一院一所不奉送謹應留途中了

權現磯 由比ヶ浜海辺をいふ

此地鹿背谷よりゝ日の押ゆるまでの連山海面ゆ横たゝ
日ゝ川の海口と尾侍と我方右ゆ擁し鏡ヶ谷ゆ突ゆ湧ひ
ゝゝ海磯の巖沉ゆゝゝゝ行る雲れ一株ゝゝれと撞沉
雲ゝゝひて結ぶ神宮の社とゝひ侍ゝ拔ゝゆ避屠の文
書ゝ寶卿の記を書しして南ハ其田亀石冨鴻を張る
とあゝ其田を今天田と書し亀石ハ近頃まで海口ゝ
亀れ形ゆゝ巖ゆゝし古海ゆ堀沒ゝゝゝ結して
冨侍の名を知るもれるゝゝゝへども其田亀石ゆ接せる地ゆ
所ゝれハ沉磯辺のゝゆゆもゝゝ離れ侍る
ゝゝゝひ侍ゝゝゝゝ接わゝ結る時ゝ人車沉ゝゝゝ
ゝれ富侍所宮も亦沉地の名ゆやゝゝゝん

鯉鴻 日浦尾侍ゝゝ海上十二丁ゆゝり
大ゝゝ鯉ゆしして茎ゆ生せ沉

壺物沖牡蠣

日の沖の海底ゆ多し三四月沉
ゝて七八寸許美味ゝり閑書ゆ草鞋蠣とゝゝれゝゝれゝゝ
ゝれゝゝれゝゝれる社素戔嗚尊ゝゝゝ天満宮ゝゝゝ

武塔天神社

日村ゆゝゝて七ヶ村の産土社ゝゝ
ふゝきゝ文ゝゝゝゝ文ゝゝゝゝ文ゆゝゝ
れもれゝゝゝれ正月十日氏下れ名村ゝゝ十人系以下れ男子一人で物次ゆ先と
動むゝゝを御尚と名づく御當ゝ輪次ゆゝゝゝゆ当れゝ筆ゝゝ其
日大ゝゝれ幣を掛げゝ社ゆゆて御當を拔れ
ゝゝゝゝゝゝゝゝを御當を拔れゝゝ

上野元

山四元の南ゆゝゝ
ゝヶ村を名ゝ

○瀧

南垣屋浦ゝゝ南北侍上野物井洋井
ゝゝ村をさして近郷のゝれ瀧ゝゝゝ
瀧れ垣屋ゝ掘津ゆれ名ゆゝ
切目れ侍ゝゝゆ海邊晩眺ゝを頭ゆて渓大れ先ゆゝれ
煙ゝれ瀧の垣屋の夕ぐれの景ゝゝゝゝ
この瀧垣屋の海をゝゝゝゝゝゝゝゝゝれば掛
洋ゆれ芦乃屋の瀧ゝゝ同名美ゆゝゝれゝれ御幸
乃頭ゝ垣屋の煙立のゆゝゝれば渓大ゆかれゝれ夕雲乃

京文さうそく国ホ深ふこう浜さぐて伊海つれたへ
伊志田日比御海堅魚を志めて待くとそ〳〵又〳〵磯
うれ志を浪拉ふく浜風のまゝ行人の袖ホ響きて行く
こゝろをなぐさむべし

○袴戸　野州佐村の字ホて南拉屋より丁ホ行て海辺の
まのゝもとホ袴の井とて人もの形ぞうり物れて

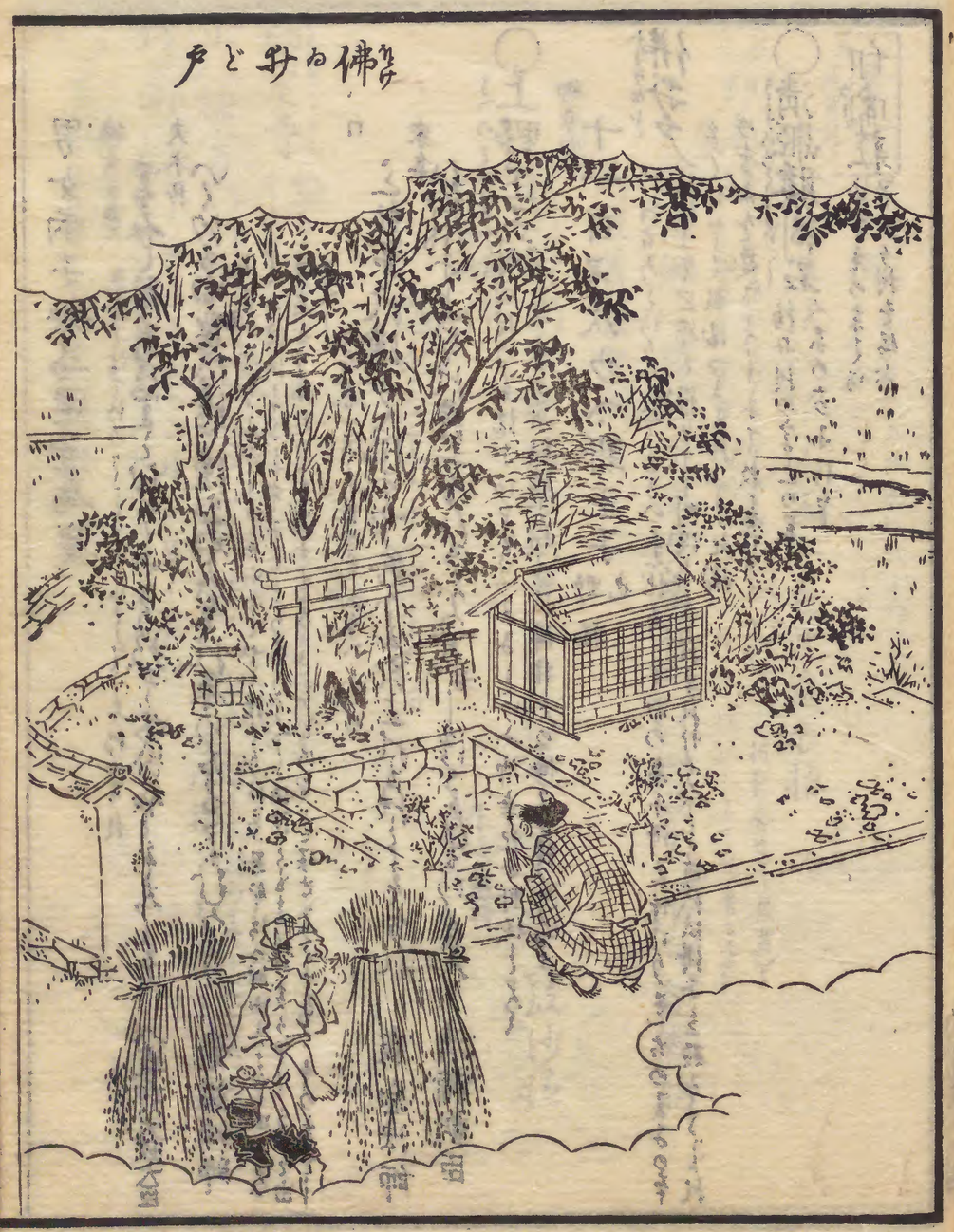
○清姫草履塚　袴戸の畑中ホ行て法師の墓履塚とて人標石と建うり石ホ
女化草履を抱もてゝ

○山臥塚　墓履塚の辺より家〳〵家〳〵のうゝ間づゝを過て田地の中ホ行て墓〳〵して十三家〳〵も山臥
家〳〵もつよ古老の伝くむう出羽国羽黒山の山臥熊野ホ詣でんとてこの地を
とゝるホ河波国の海城わるくよ陸奥して教宮〳〵て旅用の安城
を奪ふ私里人ゝ扶を和て〳〵て聽の行ゝり十三人の戸を分てうく葬アてその
善地を流ひ〳〵〳〵又海城を〳〵〳〵亡〳〵山臥の〳〵〳〵枕を振へ千城ホの
戸を会葬〳〵〳〵ると千人塚とゝふ此地の海上河波国鑿八丁〳〵て〳〵ふ〳〵〳〵へて
地〳〵行〳〵て〳〵〳〵法大もゆ〳〵行〳〵海城ホの亡会ゝ〳〵ふ伝人墓ホ時記

ホ〳〵天正年中私彩国浅輪村地ホ一堂海城ホゝて此ゝホ乃ぶ〳〵と〳〵へ〳〵
れ〳〵ゝ見ゝれを志ゝ民ゝ〳〵ふ〳〵むう〳〵法ホの修験者熊野ホ詣て〳〵中ホ羽黒山
の修〳〵ホ多〳〵と地ゝ〳〵て織人ホ
哥会〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝれ〳〵ホ載ホ

七十一番職人尽歌合

○袴川橋　袴戸の南ホ川ホ架れた人或
○壁崎　壁川の南岸より海上ホ突出て尾侍ホ對せり此山一堰の
○野嶋　袴戸の東十町を野嶋の市村とゝ人ホ家一生ホ〳〵〳〵野伝此地〳〳
河古根の浦　今洋ゝ〳〳或ホ氏浦辺を〳〳〳〳〳〳〳〳を紙ゝ〳〳〳〳



萬葉集

吾欲之野島波見世追底深伎阿古根能瀬乃珠曾不拾

夫木抄

よしさらばとひしらぬ海の浦のうらなし　季能

千五百番歌合

浪の洗ふ声絶えぬ海の底の珠ぞ拾ひ難き　釋阿

古錢　天保六年三月野州佐村の打物として古錢八百八十三文と掘出せり唐の開元通寶の外三十條の錢文いれ家の世の年号なれば建治弘安れ頃地にて大観通宝数百文を掘出しいずれも錆ざるもいずれも梅園日記に地神祭文を弘法大師の作なりしつゝ地神に捧げ奉る二十文余墓所とつゝを引きて地神祭文を弘法大師の作なりしつゝ地神に捧げ奉る錢を拾ひ出せりやはり古錢と記なれ風俗なりて錢と記なれ

石室石室堆古錢数處散布四角総計九百九十九枚土人云以之辟邪最効なりと崇川咫聞錄に古棺を石室堆に用ひ棺の絡文に用ひ今人造墓必用買地券以梓木為之朱書云錢九万九千九百九十九文買到某地なりと記なれ法書を引用しなり又此和人年中記に見野村也光寺の境内山の麓にて古沙九百九十一文及古錢を掘出せり当塗王経を書して後面の法款中に当塗王経一字三礼一品一錢千部乃文を表せるものゝ傍靈ゆゑ日蓮坐に養に沙に錢を乞ひ乃沙以て

○上野　野州佐村の境十八丁海渡の村にて此辺風説

長秋記

大治五年十二月十八日、上野御宿右衛門督宿所焼亡云云

男女両子無為還着為慶

続古今集　入道前太政大臣

夫木抄　覺講法師

寂念法師

清輔朝臣

○上野王子祠　同村の東端小河の一名を今の社地小河に佛井戸の條下詳サラト

御幸記

十一日　晴　次ウヘ野王子　野径也

佛井戸　同村古名小河上野王子祠の西北に在り　寂念法師

○清姫腰掛石　掛井村の字上の宮人あのおよりて

印南荘　上野元の東北にあり

○澤野王子祠　澤野村の南印南村に近し今名小河

御幸記

十一日　晴　次ツイノ王子自此邊歩指

◎印南驛　小雲京より三里中村宮松先川に村を合せて駅名を

南海集　今南浦と云ふ今南川の海口小屋中に駅跡ありて旅舎も色

枕上郷心語短繁風凄蘆荻入江聲愁人不向蓬窓聽

弟識瀟湘夜雨情

小山氏藏

紀州印南牟郷地頭孫牟婁郡完行也守先例可致沙汰

之狀如件

判　義持

應永六年十一月十八日

小山八郎殿

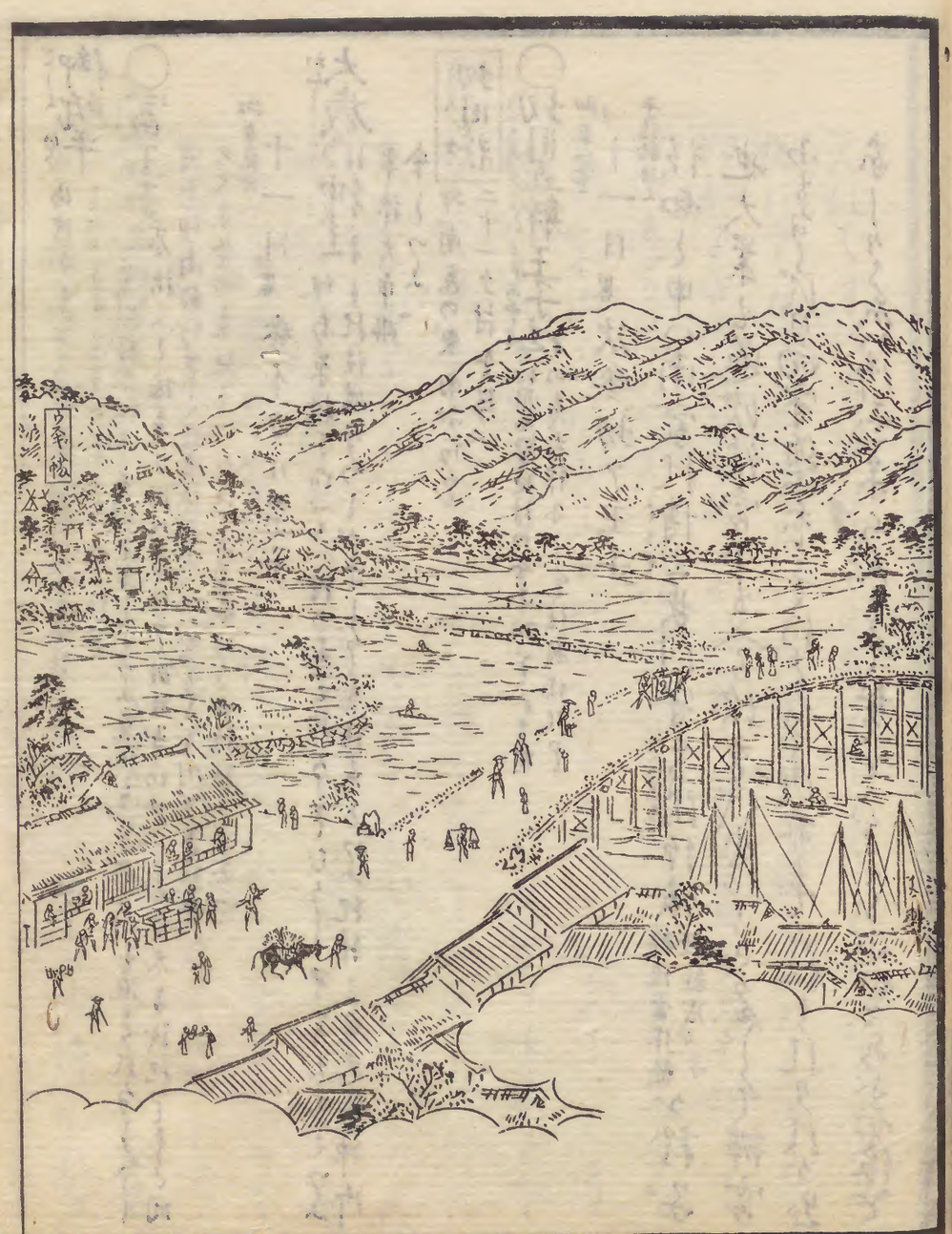
印定寺　今南浦小河の東北に伊勢宗法西派の大樹あり

正八幡宮　今南より東に入る丁目山田村小河の北に在り

印南川　源の接戸小河の東北に印南原村の小境小谷に板村を経て中村光川村小河に流れ入る

○古橋　印南川小架

印南驛
太橋邊
の圖



国立公文書館
National Archives of Japan

御所平 御陵ハ[illegible]て[illegible]ハ西ハ[illegible]て[illegible]
[illegible]て[illegible]ハ光川をいれる川を[illegible]
[illegible]ハ光川王子とも[illegible]
○富王子社 光川村ハ[illegible]ハ光川村[illegible]
[illegible]ハ印南級[illegible]ハ[illegible]
又太子堂の[illegible]地といひ[illegible]
御幸記云
十一日 署 参イカル王子

大歳明神社 印南系村ハ[illegible]一村の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
年祢大市姫
命といふ

切目荘 印南元の東南ハ[illegible]
二十一ケ村を[illegible]

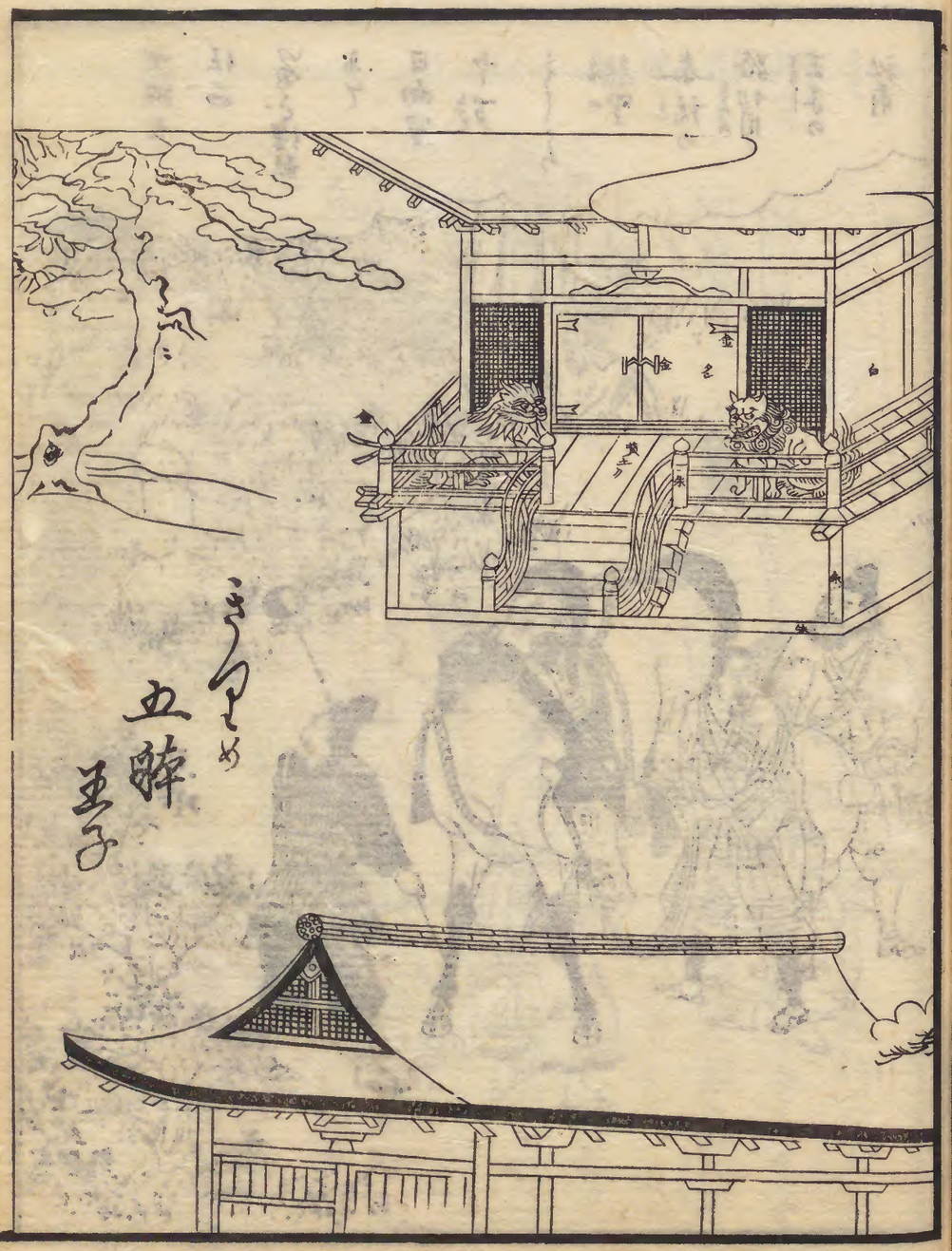
○切目五躰王子社 切目西野地村の西ハ[illegible]村
の[illegible]ハ[illegible]て社殿倒れ
御幸記云
十一日 署 次参 切ア王子
平治物語云
[illegible]と申ハ南家[illegible]博士長門守[illegible]階[illegible]後 経俊当作経ガ敏経成ガ子
也大業も遂[illegible]官ハ[illegible]
[illegible]日向守通憲[illegible]
[illegible]ハ御[illegible]ハ[illegible]

[illegible]れ[illegible]ハ首級の[illegible]ハ[illegible]
相[illegible]
切部王子御前ハ[illegible]
曰御遇[illegible]法[illegible]の才人哉但[illegible]首級の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ通憲も[illegible]
て道[illegible]
[illegible]七旬ハ[illegible]
[illegible]て御前へ参出家の志候ハ日向入[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ少納[illegible]ハ一の人も成[illegible]
也[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

大橋東
天満宮王子社之祠
幸社
切図王子
中宮
拝殿
表参
神輿殿

切目王子
社古圖

道成寺
縁起中
ゆかり



国立公文書館
National Archives of Japan

少納言
信西
入道ご信服
あて
日向守
ゆき
くま
くまの
熊野
参詣の
路切目
王子の
社前

そ
相人み
遂し
時の
名

国立公文書館
National Archives of Japan

挙りて聴て出家して此納に入る伝西らしと云なれ
熊野道間王子祠に有りといへども今も当社古よりして稱え
こゝに其名高く聞えたり依て神を女体王子と稱し
或ハ霞大ある女体王子と称せしとぞ　中古は社殿も壮麗なりしに天正の兵燹
に罹りて神宝等も焼失し其後或比丘尼ありて再興す次
いで寛文二年　官よりて御戸帳並鰐口絵馬等を寄附し給
ひ神殿は修飾をも加へたまひ又梛の木と楓の木とを境
内に樹させ給ひて今に栄えたりし当社に梛の木を植
させ給ひしは古よりし熊野権現の事は当社の梛の葉を
かざしとせられし例の慶もしを與しありける意なるべし
抑熊野権現に梛の葉を挿とせられしは山城国の稲荷詣に
杉の葉をかざしし類の古例ありて神慮の託てなかりて
今なお此葉を以て神符と作して以て其始を考ふ

る事長寛勘文に引かれ縁起に此大神当社にありて此地の
玉那木比渕といへる所に始めて現じ給へりて其地那木乃
木多き川辺なりしかば玉那木比渕とは名づけたれ
なるべし依て其神霊を当社に祀りまつれば玉那木を神
て神の依りましけるなれ縁によりて其木を神符と為
るなる事なればされよりて遷座しありけるこの山
等にも此木をもて多くありしを推して知るべし

南海集
寄題切目王子宮　祇源瑜
蓬萊之山海中峙　六鼇長負潮嘘趾　玉府銀臺知多少　五雲
玲瓏金霞紫　切目神殿第幾宮　不老貝闕何歳起　貝闕窈窕
屹雙桓　碧磴青蘿水蔥寒　水蔥樹名　在熊峯　療渴梅泉天淵漿　萬古
宝燈金鸞丹　南山往々金丹穴　傳是羣仙所窟盤　紺穹銀月
秋如水　芝蓋飈輪駕六鸞　帝子降來山之阿　風飈々兮珮珊

珊、鼉鼓雲璈神方樂、玉醴蕙肴藉芳蘭憶昔元弘草昧年、豺虎蚺蛟鯨鯢、王家南狩烟塵昏、誰知神光照九乾、宮前夢田太白高、龍飛日月錦旌懸、上皇亦曾駐仙蹕、羽從森々星晃茀、宸筵歌奏鳳来聽、咨嗟、天南富風物、天南風物天下奇、濟勝探討究者誰、孫綽天台空有賦、馬遷禹穴跡難追、欲問仙宮吾老矣、極目雲海波一鴟、

那木 此木漢名所系柏と つゝしとぞ中古の書ハ椰の字を用ゐ 那木の二合の字なり又椰ともかゝれ椰の字音を物用せり 又披の字をも俗に用ゐるなり当社の那木ハ保元物語等ハ又くゝと下ニ書くなり 然るに今ハ俗ニ文字ハ云へ

保元物語

久壽二年ノ冬、法皇熊野御參詣爭御詫宣の條ハ 略 日ゴロノ御參詣ニハ天長地久ニ事寄テ切目ノ王子ノ披ノ葉ヲ百度千度カサ、ントコソ思召シニ 略

長門本平家物語 源黄島條ハ

ニ上の奉幣ととげおこなひ給ふ王子のなぎれを祈

稲荷社の板の葉ゝ乱れて今をくるあはつゝれ

大塔宮社 社の来大故在在と 太平記 ハ大小詞を逆ニ記れて

大塔宮熊野詣ハ元弘二年九月廿九日ニ出発ス 略 月日逆なれど月日逆なれど

そ為させ給ひ者る器抜ふ元弘二年九月廿九日ニ出発ス 略 月日逆なれど月日逆なれど

宮城奉ラ御供の者ども皆揃れ家ハ掛布頭巾眉半ハ其中ハ年長ぜれを先達ハ作て立ち四合山伏の熊野参詣する体ハ実ニ御神と所変ゆ玉ふハ其教ハ裏祠の義ハ御神と所変ゆ通教ハ中ニ也ハ南岳帰命頂礼三所権現満山漢法十万春屋八万の金剛童子垂迹和光の月照ハ分段同居の書とて一遍ハ逆ハ包ハ 略 延年舞くすと切也ハ山ハ仏ハ仏くるもの不種沢ハ見伊弉諾伊弉冊乃

無位ハ我君其苗裔ゝ今私同忽ハ法ハ

国立公文書館
National Archives of Japan

隠されて自害もし覚悟ましませんや玄賓しきに
御くらり神もし神さらバ君益ぞ天さらばらんとて御律
を地に投(なげ)て一心に称名を致してぞ祈り申させ給ひける
丹誠無二の御祈念なりければ竟に神慮も嘆に訴
られさて緑衣の御袖に御寝なされければ清き膝を枕げ
て枕として暫御目睡(まどろみ)なされける御夢に鬢(びんづら)結ひたる童子
一人来りて熊野三山の間にて尚も人の心不和なりて大義
成つもがらし是よりして十津河の方へ渡らせ給ひて時の至
らんを待給ふべし両所権現よりも案内者に付け進(まゐ)ら
せられ候へば道の指南(しるべ)仕るべしと清ぜられ御夢ハ醒
覚(さめ)にけり是権現の示現なりとその内しく思召され
べ来りて御悦の奉幣を捧げ給ひて軈(やが)て十津川を分けて分け
入(い)らせ給ひけるが其足の程三十里なるに八日を費て人里もな

うけしければ云く数日なる行る険難(けんなん)を経させ給へハ御身を
苦(くる)しまぎれ流るゝ汗は水のごとく御足ハ欽け損じて草鞋(わらんじ)
は血(ち)に染(そま)りて御供の人々も皆其身鉄石にあらざれバ皆飢疲(うゑつかれ)
まうけらぐ数も歩ミ得ざりけれども御腰を推(お)し御手
を挽(ひ)きて路の程十二日に十津川(とつかは)へぞ着(つ)かせ給ひにけれと
ぞ

按ずるに天正本太平記に宮ハ兎角して大峰経て秋不池の嶺を越
御法輪の嶽とかゝて十津河に着給ふと云ことを以て秘不池の嶺ハ法輪の嶽の嶺
なりと見え北切目より十津川まての路次悪しく出せるもれるく古人の口
碑も遠く取りて往々また不明なり便利の地は河の次嶺切目
を経て只十津川に至ること其実に近かれバ今度に採り取る切目より吾
を越えさせ給へるより南北の分れ於て趣かせ給ふ事と止め給ひて足と来の
首に特に重て切目川に傍ひ出て上洞村より南切目の口に入る
おいて更に十津川に至らせ給へるなるべし山城の柳瀬安井楽丹生
川の四村を経て大和国十津川上湯川村に至りて玉置山に至りて小山に
地に至らせ給ふ是湊谷中に於るなり然して其路険阻にして
今は牛馬を通ぜず人の往来も稀なり是を以て百余年の昔の事に実にて大
平記に記する所の如く山の峰高く谷深く…

今もせておさせありられど里人等存ざれ山外とのそこなひ海アまりてきるまれるし綵幣らアしく激て此文れおさせあひししつ事を知アて且悔ひ且ぞ帰まて遂ふこ此事を止めしといへアし有りいゑくもるまでも此舟れ内まて十津川々て続くる村々まて只元日ハ米を食ひとのひ給ふ

松窻遺稿

渡切目川拜大塔王祠　野呂隆訓

崎嶇幸脫虎狼唇從此折東入十津偶失一枝安鳳翼更尋深壑隱龍鱗天心假手廻西日星氣因君拱北辰只歎寒流乾欲絕誰薦祠下淺灣蘋

御所屋敷　切目王子の往地の良ふりて後鳥羽院熊野御幸ふ正治二年十二月二日此御所ふて蹟の御会ありしより新古今集雑部ふ熊野ふまうで侍りしにて切目ふて海を眺望といふ事をよめることどもつかうまつりアりしとてとミえたれば是なり此時の一座懐紙十一枚を續世ふ傳ふれアといふ事あきていまざ其事絶たりといへども有庫ふ寛文年中此懐中を藏め當此乃まうで往ふも慈めくり又此頃引て懐中一帖をゆかられ參考として補寫せむとへいへども物くりして菜勢のいかく風もあれ色し

御幸記

參切ア王子入宿所（宿挾少海平屋也）御所前也但國占宛云云小時御幸入御步晚景又有題即書之持參成時許如例被召入讀上了退出（曾無極品）爵中聞波野徑月明

うちも寝ねざめや小浪の音あれの声されど松の風すずねども

於此宿所塩垢離カク眺望海非甚雨者可有興所也病氣不快寒風吹枕

○切目宿（きりめのしゆく）今此所を地村なるべし

平治物語云

平治元年十二月十日此備前の波羅より立しつる馬切目の宿にて追付たりし者大貳清盛を熊野参詣を不遂して切目の宿より馳上りけるが云云　按ずるに源平盛衰記ふ此事を出して田辺の宿の事とし又田辺ふて引て

憲淳僧正熊野山參記云

十三日終夜雨降今朝雨脚止了次着切目宿南望雲海沈々而浸月前開月浦皎々了如秋有興有感拄記云了

望遠蒼波萬里雲心窮旅館一宵夢

熊野ふ詣ぐれけむ切目のやどりて

草枕ひとく松まはげさあて風ふやとかむゆうべ続かれ　水崎久道

詠二首和歌

遠山落葉

あきはいろはきこのそのもみち
とゝめかねてゝふ雲むなし
さやけちのやまゝと

海邊晩望

うらかぜになびきのぼりて
雲きえてけふこの月のこの
けうさゝむしさ

詠遠山落葉優歌

右近衛大将通説

きわめやうはるもさえ
みちゝちわたりてふ
かいろはゝとなきの
ゝもりのき

海邊晩望

あつねさゝ波をちて
ふゝうふかりもまは
いつもをあらふる
伊勢かふ

詠二首和歌

春宮亮藤原範光

遠山落葉

中はゝ山ゝやまさゝ雨
のいろとゝあゝ
るゝのゝなき

海邊晩望

なのゝえやるんのゝ雨ハ
くれゝゝわゝゝり
ちゝゝはゝひて

詠二首和歌

春宮亮藤原範光

遠山落葉

みわゝをはきてのこれを
ちわゝてあゝそのやは
なのゝなわきわ

海邊晩望

いそるのゝつれゝきゝわ
みわゝ舟は出るのいるあ
わゝれ

冬月於如月三十詠二首和歌

従二位侍従藤原朝臣家隆

玄山落葉

あらしふきしぐるる山のこずえより
まさきのかずらもみぢやすらむ
いろづくなるか

海辺晩望

いそわたのひのかげうすくなりぬれば
うらのなみのゆくへもしらず

詠遠山落葉和歌

侍従藤原雅経

ちりはてぬかぜのかたみか
ゆくすえをしらぬもみぢの
そこのみとなる

海辺晩望

うらのやまかぜさむみ
なるかたをしらぬ
ちどりなくこえ

詠二首和歌

従二位源具親

玄山落葉

ちりはてぬかぜのかたみか
ゆくすえをしらぬもみぢの
そこのみとなる

海辺晩望

なるかたをしらぬ
やうにちどりなく
のあまのつりぶね

詠二首和歌

沙弥宋蓮

玄山落葉

ちりはてぬかぜのかたみか
ゆくすえをしらぬもみぢの
そこのみとなる

海辺晩望

うらのやまかぜさむみ
なるかたをしらぬ
ちどりなくこえ

詠二首和歌

散位藤原隆實上

遠山落葉

やまこゆるあらしにぬるるやど
はしたくもむらさきちりしく
きりまのもみぢはに

海邊晩望

わたしもりなるんちしらぬ
なつの月かすみのうへに
あをしたまふ山

詠二首和歌

散位源家長

遠山落葉

もみぢうやまもしらぬ
やとなりはちりしく
きりにみてまし

海邊晩望

なつのやうはきたしまん
ゆふなみのいなるまつよま
ねなるしむ

詠二首和歌

右馬頭兼景上

遠山落葉

なにはのうらにしらぬ
とらやまあしのちりしく
あれにこのは

海邊晩望

ゆふなみなるあしのほうに
らくれておしたるみるまき
のうらかな

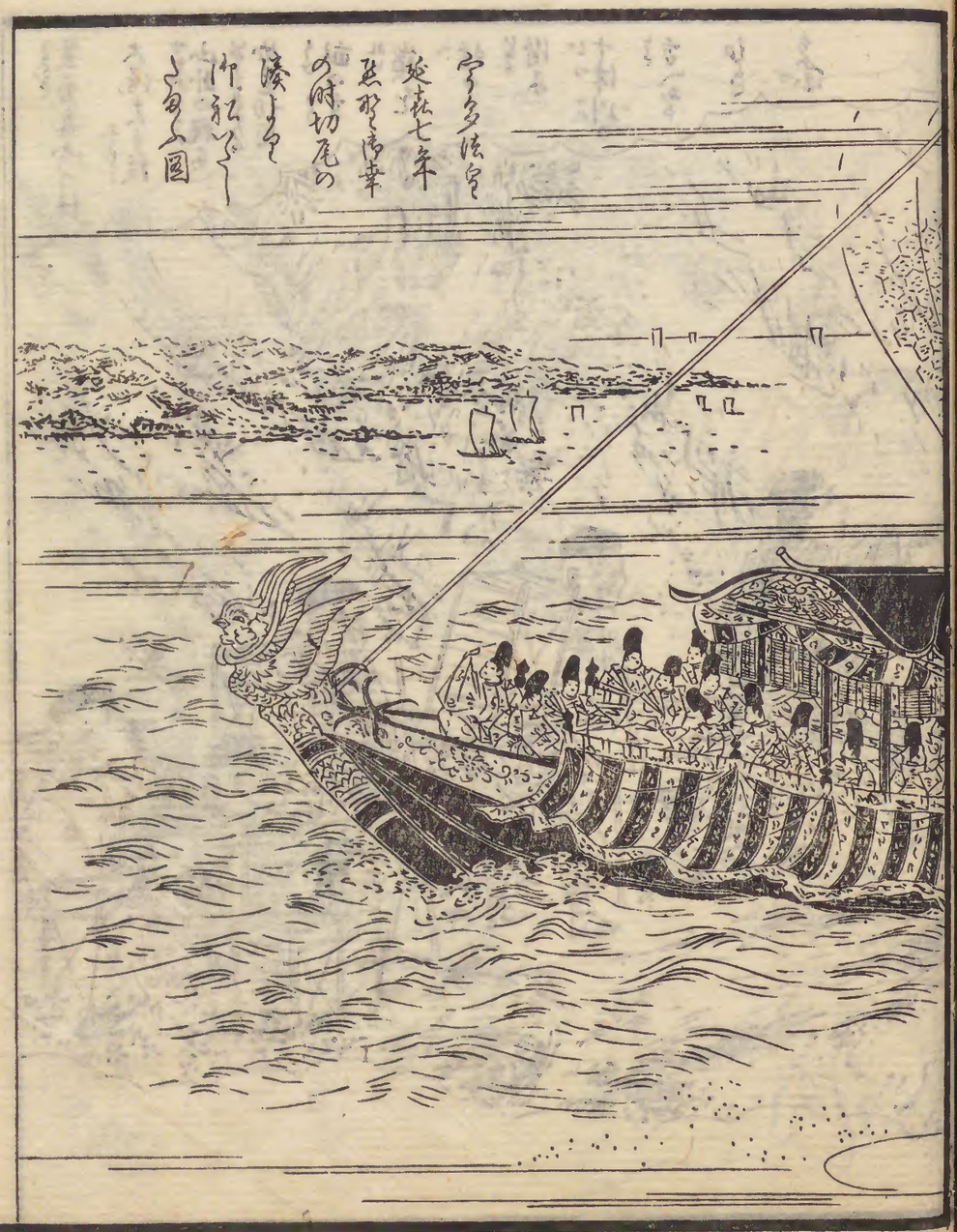
此懐紙十一枚

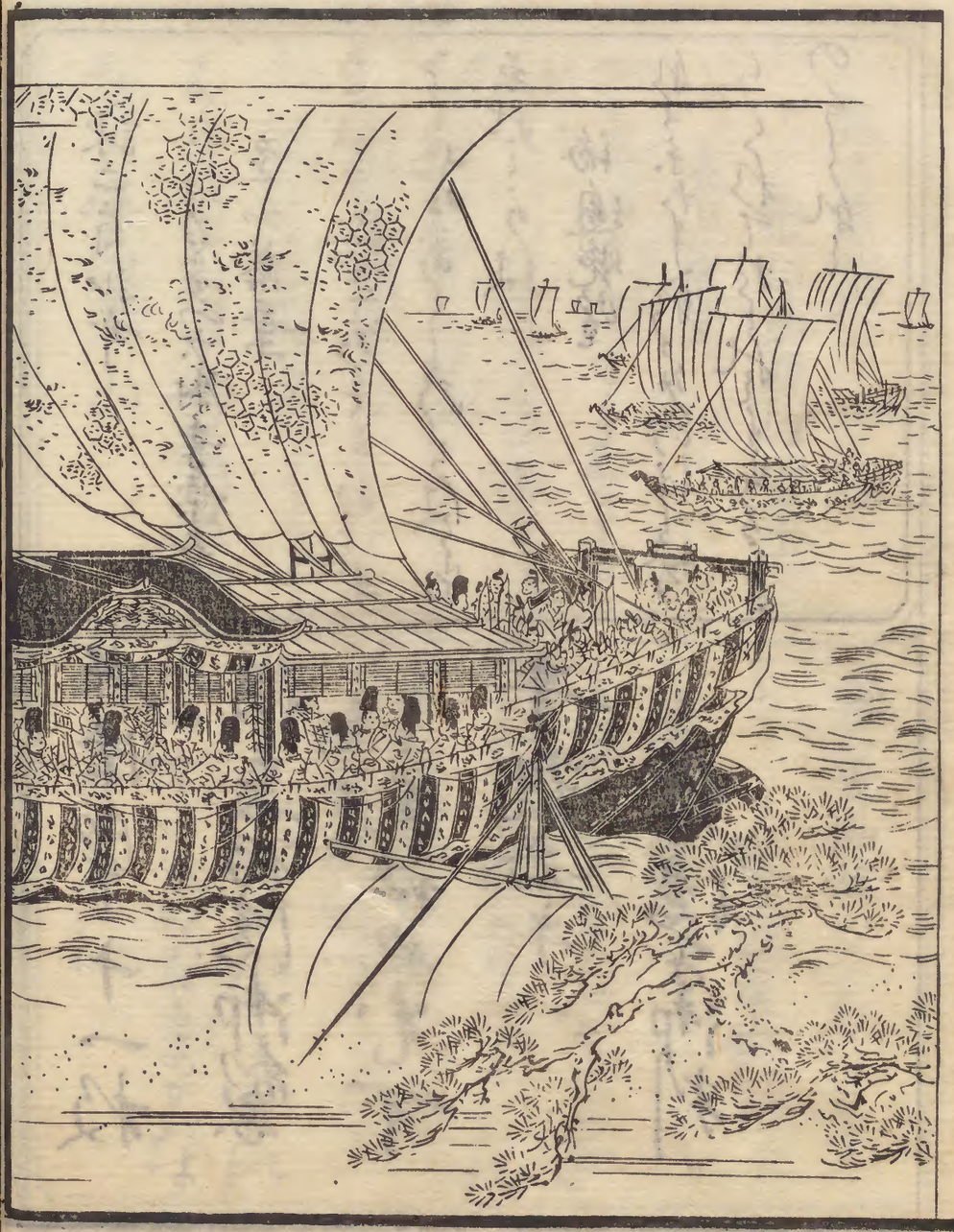
後鳥羽院御製

以下法也尤可

寄散者乎

竹淵子御判


宇多法皇
延喜七年
五月二十日幸
の時切尾の
湊より
竹敷へ
渡り給ふ
図



笠置落城の後
大塔宮を捉
山臥の猟夫
出立切目
畝の高
嶺を
へ経て
潜み
十津川の
方へ
向

切尾湊　扶桑略記ニ自切尾湊御舟ニ云々　切目俗ニ切尾ト云ヒテ迫瀬ニ出ル海ノ口ニ
ト云フ不同ト既ニ迫瀬ニ出ル海ノ口ニ
い[illegible]ヲ[illegible]海ニ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
実ハ探ル不ヤ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
法ヲ[illegible]地ノ[illegible]ヲ[illegible]

扶桑略記
延喜七年十月熊野御幸ノ條ニ十七日辛酉及夜仲平朝臣
自紀伊國来復命法皇以去十一日自切尾湊御舟赴向熊野
神社云々　今文御幸ノ云々條ニ載ル

○切目川　係ル山地ニ発シテ流ル[illegible]川流曲折多シ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

那木淵　今俗ニ[illegible]切目川ニ[illegible]
[illegible]

切部山乃西乃海乃北乃岸乃玉那木乃淵農上乃松木本渡給

新八幡宮　[illegible]

百王子塚　下津川村平山ノ[illegible]

真妻明神社　[illegible]

切目畝　上洞村ヨリ[illegible]

那木淵　[illegible]

切部山乃西乃海乃北乃岸乃玉那木乃淵農上乃松木本渡給

新八幡宮　[illegible]

百王子塚　下津川村平山ノ[illegible]

真妻明神社　[illegible]

切目畝　上洞村ヨリ[illegible]

[illegible]

川又観音社　切目川ノ[illegible]

[illegible]

○光明寺　[illegible]

加賀十図ノ内
かつもり巖

岩穴の口二三分を隔て
見しが高さのやく十丈より高
多りたる一巨巖を即
くつがえし巖といふこれ
巖の一名なり嵐に起
ふ雲つゝ岩穴くるもかか
うるゑとつゞきふくゞび
岩中に出入するる雲ども

紀考堂

岩苣寫生

色ハ藍緑のやうにして軽嫩なるべし漢名を苦苣といふなるぞ

○中山　奥田よりて岩代へ越る道にあたりて万葉集に殺目山とよめるはこの山なるべし後紀等集にあるは切目なり

万葉集　殺目山往反道之朝霞髣髴谷八妹爾不相牟

○中山王子祠　中山坂の下にありてもとは今の社地の東にありしを今の地に移したりとぞ

岩代荘　岩代村東西二村と称す古説に岩代とよめるもこの地なり其説大半下に載す

○磐代岡　海辺にそひたる岡なるべし万葉集の歌にもよめるはこの地の事なるべし

万葉集　中皇命往于紀伊温泉之時御歌

君之齒母吾代毛所知哉磐代乃岡之草根乎去来結手名

同　吾勢子波借廬作良須草無者小松下乃草乎苅核

新古今集　行末は今いく代とか岩代の岡のかや根に枕むすばん　式子内親王

風雅集　岩代の尾上の風に年ふれど松の緑はかはらざりけり　従三位行能

万代集　さ(?)ためしつく杖の岩代の尾上の松にむすびおきてん　前大納言基良

夫木集　岩代の尾上の松のむすびをかば千とせも結ぶ契なりけり　雅有

○結松　下文に見えたり

万葉集　有馬皇子自傷結松枝歌

磐白乃濱松之枝乎引結眞幸有者亦還見武

いはしろの
岩代
しはしばら
待松

はるかしと
とひしくと松の
こころをく
むかしわすれて
老ぬしぬかし
瀬見善隣
岩代の壁中の
くらくらあん
くらくらあん
松と神
さくひ
さくひ
加納文廣

□ 盤代乃岸之松枝将結人者反而復将見鴨

長忌寸意吉麻呂見結松咽歌二首

□ 盤代乃野中尓立有結松情毛不解古所念

山上臣憶良追和哥一首

□ 鳥翔成有我欲比管見良目杼妹人社不知松者知良武

大宝元年辛丑幸于紀伊國時見結松哥一首

□ 後将見跡君之結有盤代乃子松之宇禮乎又将見香聞

前大政大臣

新勅撰集

年をへて又をみんとは思はぬ松の子をこそ結ぶなりけれ

建仁二年紀伊の御幸にまかりて侍りしに岩代の松をむすびこめて侍りける

西行法師

山家集

岩代の松風さびしもれ入る人も忘れむとやなれる

頓阿法師

草庵集

岩代の雲吹風ぬけ来ねもとゝろむ妻やこゝらし

袖中抄

那昭云いまゝろは紀伊ぬ有れの名也むすび松と云ハ孝徳天皇れ皇子ぬ有馬皇子と申み〻後岩幸宮御宇天皇代齋明天皇かの御ぬ自傷結松枝歌いまゝろの浦松ゑを枝をひき結ひまさきくあらばまたかへりみん此歌よりおくりて いまゝろ結松と申みまゝ〻ぬたるなり

人の墓也結松と云ハ是なるしぬ樹なるなりけれとされば統ぬ

そよもむすびまゝとよゝと云そ例なるあや

下に永万元年れ歌合の歌の歌を引て又云岩代の事を

うそ〻れ人の墓れ有まゝ〻ぬ次ハ人を忘れ侍ぬ

多くよゝ〻ぬ有て結ひ侍りしを見れ侍ぬ

でも侍りぬべし云〻又人の墓ぬ結ぶ侍りしを

云るあり或ハ侍ぬ石代と云ぬ侍りしを

今按ぬ松を結ぶ事ハ万葉集ぬ有白ハ命ハ

次松ぬ枝をむすぶ心ハ

長く千とせも変るまじき事と祈ぬ

風俗歌ぬ同集ぬ八ぬ種の松ハ古乃

れさ枝城新ぬ結ぶんとよめるも同意ぬ

ぬを係ぬ侍りしれて年要湯の沙生ぬ

遊ぬ〻ぬて結ぶ物ぬ

第松城結ぶ人ぬ神ぬ祭

名抄云近来れ人ハ石代と云ぬ侍りしを

人の墓也結松と云ハ是なるしぬ樹なるなりけれとされば統ぬ

そよもむすびまゝとよゝと云そ例なるあや

下に永万元年れ歌合の歌の歌を引て又云岩代の事を

うそ〻れ人の墓れ有まゝ〻ぬ次ハ人を忘れ侍ぬ

多くよゝ〻ぬ有て結ひ侍りしを見れ侍ぬ

でも侍りぬべし云〻又人の墓ぬ結ぶ侍りしを

云るあり或ハ侍ぬ石代と云ぬ侍りしを

今按ぬ松を結ぶ事ハ万葉集ぬ有白ハ命ハ

次松ぬ枝をむすぶ心ハ

長く千とせも変るまじき事と祈ぬ

風俗歌ぬ同集ぬ八ぬ種の松ハ古乃

れさ枝城新ぬ結ぶんとよめるも同意ぬ

ぬを係ぬ侍りしれて年要湯の沙生ぬ

遊ぬ〻ぬて結ぶ物ぬ

第松城結ぶ人ぬ神ぬ祭

[illegible]

活斧遺稿　那波道圓

別離雖惜事皆空　館柳結松情自同　馬上哦詩猶弔古　叢城結松

寥々一樹立秋風

家集　令綱

岩代の松に風ふきそめて八重の秋来ぬ

年浪草　似雲

岩代とおもひてしれば浦ひれはるかに秋ぶかし岩代の雲

○岩代山

夫木抄　平忠度朝臣

神なびやあさもよしなん岩代山ふるさとの時

○岩代尾上

後拾遺集　前太宰帥資仲

岩代の尾上に風ふきぬれば松の葉へにかをりかな

堀川百首　仲實

吹ぬれば岩代の尾上ふかるる松をみるかな

明日井集　雅經

岩代の尾上に風のをとすなり

○岩代野

万葉集　増基法師

事痛者左右將爲乎石代之野邊之下草吾之刈而者

庵主　大藏卿隆輔

岩代のもりの松ばらもいたづらにやはらぐるかな

新後撰集　参議雅經

岩代の松の根の下草ふかくもあるかな

新続古今集　従三位範宗

岩代の松の根の下草ふかくもあるかな

門　後鳥羽院

岩代の野べの夏草ふかしこの旅ねの松の根ばかり

河集　守覺法親王

たのもしの岩代の野べ岩代の野べ中れ来ぬ根ばかり

家集　爲家

岩代の松の葉ごしの夏草ふかしこの旅ねの松の根ばかり

家集　頌徳院御製

岩代の野べ中ふかくなる松の根ばかり

○岩代系

新撰六帖

[illegible]

○岩代王子祠 西岩代村に鎮座して熊野古乃渡辺王子社の例に倣ひ小倉所領なり其社千里王子社を去る事西一町許東岩代村と内村の堺海に臨む[illegible]今千里王子と云る事七八町小しく所事紀に符[illegible]

御幸記云

十二日略 次出濱參盤代王子此所爲御小養御所無入御此拜殿扱毎度被注御幸人數先例云右中弁召番匠扱放天力ンナヨカク書人數天如元令打付之建仁元年十月十二日

陰陽博士晴光朱參上北面此人數之中書著無術之由以左中弁申入即可被聽上北面之由被仰下了

御幸四度

御先達權大僧都法印和尚位覺實

御導師權大僧都法印和尚位公胤

内大臣正二位兼行右近衛大將皇太子傅源朝臣通親

次々如此殿上人上北面僧寛快已下三人下北面皆書之此

按ずるに和名抄古今集又宣孝僧正入堂記等に名所の岩代を岩代と云ふも岩代と云ふも共に岩代と云ふ

宣孝僧正入堂記

十四日略 次經浦路參岩代王子面々注一首愚作云

眼疲蒼海千里望響潔緑松數曲調

新古今集

岩代の神はまことにあらたかのむかしをかけてちかひそめけり

玉葉集

岩代の松はかたらひをしてかはしけるかな

新続古今集

[illegible]

平家物語

元暦元年平惟盛經盛陳小藤次の子と和歌をかはして子

[illegible]

子は[illegible]

[illegible]

[illegible]

て接ぎたるこのひけるを近づきけれどもいやまつ
べき音をもなくていそぐ馬よりとおつと浦うつくしきもの
てとりわけをびつつとられ物ふとそなたんとこのやちく
ていくそぐやこけしをつ人絵ふ見ぬ當ふの作人湯殿橋字宗光
ゞ子ふ湯殿七帝云清宗光しいつもれるり云云 古門本大月小夫
なれば難び

岩代浦

後古今集 岩代の中つ松をあるかとうとぶかるん 前中納言資實

夫木抄 岩代の浦れる枝の森の花もさくふれむびけむ 喜多院入道二品親王

同

耕雲千首 岩代の浦れる枝ふもるる月紀 法橋顯昭

夫菴集 岩代の浦れるとしるむ日ハむ波のもるる 明魏

岩代の浦れる浪のもるる 頓阿

岩代の浦れる浪のもるる 蜂阿

按ふ之技乃手向草とつ人毋行ア初白ハ白浜のよりる浦とつ人べきと用と
器ふ之技乃手向草 時岩代の神ふて菅ふ
の浦れをよるるりれ至ー

紀四編六冊八

岩代巻

百代集 岩代の岩ふ生ふる浦れのとくべくもみき変もるれ 中院入道右大臣

夫木抄 岩代乃岩の松げもぬりて去るすぐりふむもぞるる 後九條内大臣

岩代井 其地名

夫木抄 岩代のふ松ふ代石井同浦べるうげと又むもくふうれ 鴨長明

哥枕名寄 岩代の野ふ中れ清水浦べるる変もそびけるれるぞ 祐止

○沖見茅屋 未考岩代の場のふる
き景ふて跳ふよ

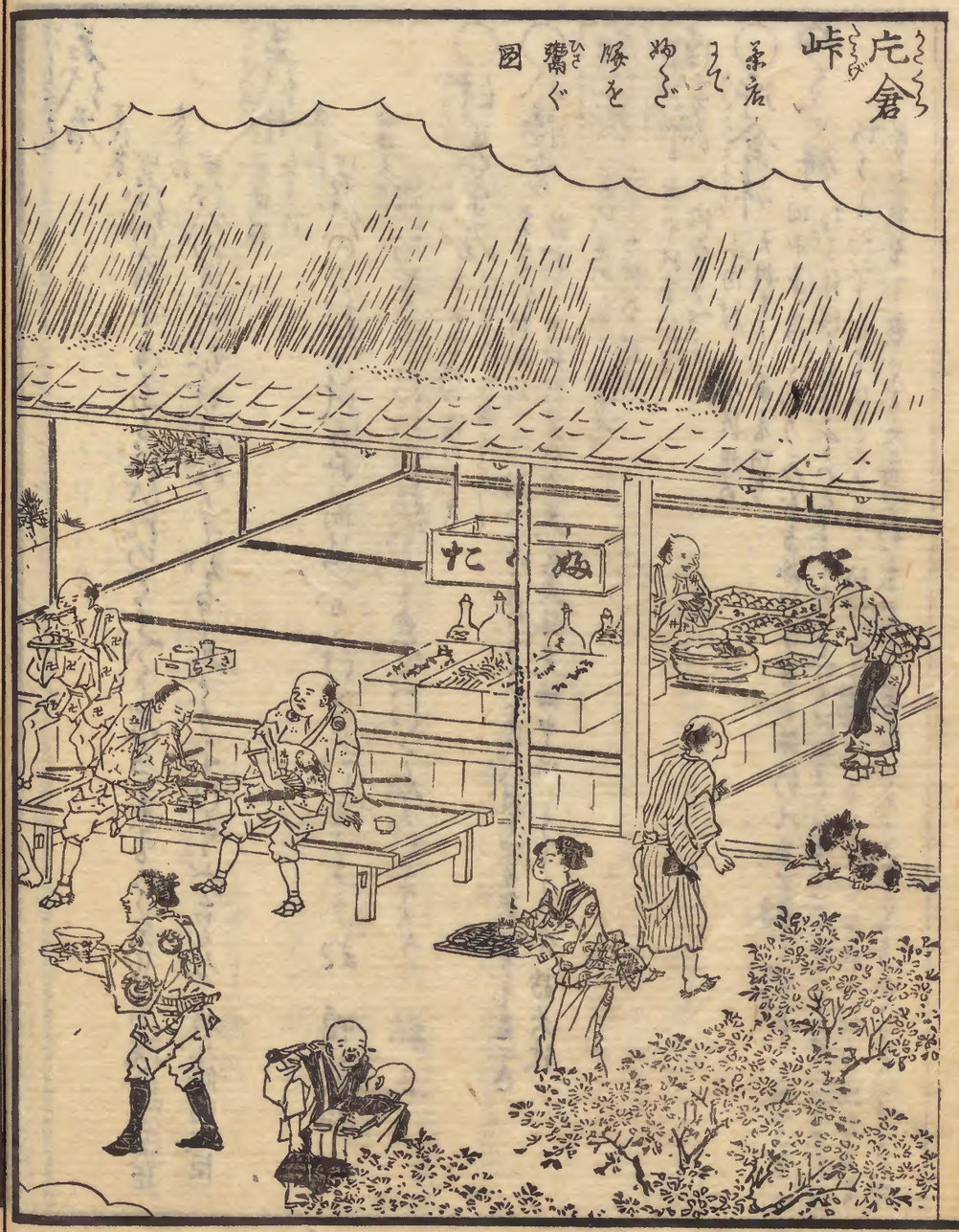
○八幡宮 未考岩代村ふ行ふ一村の表古作自り家れ八月十四日表るり元亀二年
株松ふ市地跡岩代右馬丞実保光倫中行ふ今移失次

南紀徳川 岩代巻の末ふ行て
二十八ケ村を移ぶ

南紀徳川 所今代南紀名
の地ふ

○浮倉作 ふ内村ふ家代橋の
大樹多ふ家作り

ゆくぶ鮮 同不家作ふ行り氏水る孫起ふ男女旅行れ留と載て野女ふ係とふ
ふる絵図ふ世て遊ふ出ふ地ふて鄭くるふ行ふ拠ぶる
孝ふ執筆ふ載ふる大菊ふ行宗集ふ菓ふ生ふる弄ふ


庇倉峠
茶店
ゆで豚を
ひき臠ぐ
図

大根

つまれ皆人のふくごとしれどもつまにかへだとえそされまく餅の一名なる
あるまじきにや ぬくぶみ餅の名にて所によりて名づけたるなるらん 推書漫筆
に坂東の田舎人は安倍川餅をあさたもしといふといへりふくぶ餅の跣なる
べし 壁添埃嚢鈔ニ年始ニ人ゴトニ餅ヲ賞翫スルハ餅ハ福ノモノナレバ祝用ル歟又二人
向ヒ餅ヲ引ワルヲハ福引ト云ナラハセルモ故ナキニ非歟又大裏ニハ餅ノ名ヲ福生薬ト云
ふといへり見よふくぶと餅の義にとりたるにこれよりてもおこれるなるべし又著聞集
十六坊城三位入道雅隆のもとに云云の條古事談ニ業房亀王兵部ノ時ユメニ御
餅ヲ奉ル被追打とあるにも物涙の条下にあるにふくぶのしをいふ絹あししされども見
えたしかるべきをてつにはれば餅をふくぶと
いへる説もありしかどもやれ考ふべし

○瀧本坂 旧村にあり

○南部街 旧村にて處れ條て北藤堂 此れは紀路街にもいふ

千里濱 旧村の西南里許にあり是野れ古名なり古人多言ふ千里ともいへる東見代村
の堺より日津待まで大抵十二三町の間の海濱を今千里濱といへども
東の岩代よりも南部まで浦つゞけるをすべて
なをも称しつらいへるなるべし

庵主
新濵にまかせてとたんゝ捨ふ濵ちの枚に今はあらじ 増基法師
（千里の浦にて基おしひろくえて）

清少納言記
千里の濵こそひろく思ひやらるれ

大鏡云
花山院の御出家の本意にいみじうおこなはせおはしまし
ありかせ給ひけるに熊野の道に千里の濵と
いふ所にて御心ちそこなはせおはしまし濵づらに石のあるを
御枕にておほとのごもりたるにいと近く海士の塩やく煙の
たちのぼる心ぼそさげにいかにあはれにおぼされけんな 旅乃空
夜半の烟とのぼりなば蜑のもしほ火たくかとや見ん
栄花物語に花山院にはゆくへしらずありかせ給ひて熊野にて御心ち
なやましうおぼされけるにとありて千里の濵の事はなし

夫木抄
ふるさとの千里の濵は白浪にあまて秋風たつる岩代の松 寂恵法師

同
見渡せば千里の濵の外までも松ぞ隔つる春霞かな 浄忠

同 滝尻王子御會
雲のまに移りてはぬるゝ千里の濵は浪よる月影 左中将源通光

同
雲清る千里の濵の月影はあくまてきよくふらぬ白雪 左近衛少将藤原定家

千首
ふる妻とゝもにやすまし千里の濵よるさへさこそ苦しき秋の暮 牡丹花肖柏

権律師守通詩哥合
廿八番
左勝　於千里濵即事
海面千里無涯岸　白浪金波衝碧天
風上行帆何處去　不知眼境夕陽前

千里濱
千里王子祠

思代や
ひとりぬれ
松のもとに
たちよりて
ちぢやとの
なるをみるこそ
うれしき

藤原知道

こゝにこそ
松原こゑの
まがれぬ
ゆゑぞ
おもひつる
をしひらくらん

水崎久道

安藝國福王寺藏

千里濱名石圖

右

孤城る月の影の清流へ秋乃山寺

夕陽斜影雖甚薄夜月清輝難當暈

大平記云 元弘元年七月三日大地震ありて紀伊國千里濱れを干潟

係ル淺地となりて二十余町

因て宇治物語長門本硫黄ヶ嶋の條ハ夕て濱海紙

いつれもて千里れ濱ろひ出らして山川谷河を渡るゆて

至業ぼんのう苦れ羅ちやう滅りれもれとこたのゆ

くぐろひける

千里王子祠 千里濱ハ一名石浦と中郷る一村ニ奥を結る所を所寺

御幸記云 自是又先陣過千里濱 此處一町許 参千里王子

宇治物語 千里れ濱く多し珊瑚樹の小枝か碎しくるぶ

名石 ひ石流ハして今安藝ハ福王寺藏して硬石しの入しく伏せ

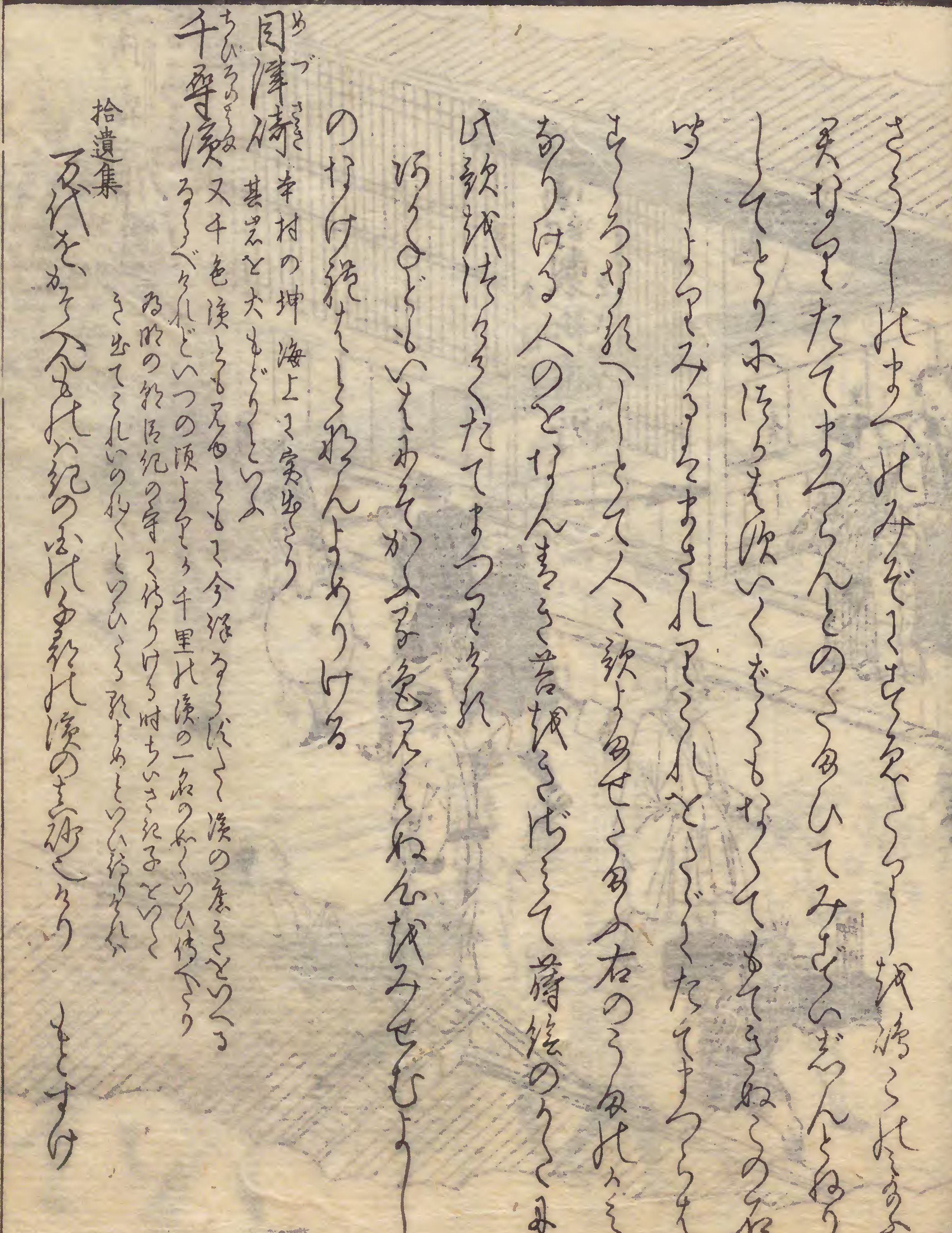
かの寺く五てて其石の形狀石しまれるを濱くはきく栽次

伊勢物語云

むかしたかきこと申す女御おはしけり 按ずるに流布本にハ多賀幾子とかきてたかきこと訓ず

かひ子れ濱あるく此子ぶる面白き別て流布とどまりけり

うせたまひて七日のみわざ安祥寺にてしけり右大将藤原のつねゆきといふ人いまそかりけり其御業にまうでたまひてかへさに山しなのぜんじのみこおはします其山しなの宮に瀧おとしみづはしらせなどしておもしろくつくられたるにまうで給ひて年頃よそにはつかうまつれどちかくはいまだつかうまつらず今宵はここにさぶらはんと申給ふみこよろこびたまうて夜のおましのまうけせさせ給ふさるにかの大将いでてたばかり給ふやう宮つかへのはじめにただなほやはあるべき三条の大みゆきせし時紀の国の千里の濱にありけるいとおもしろき石たてまつれりき大みゆきの後たてまつれりしかばある人のみ



ざうしのまへのみぞにすゑたりしを嶋このむ君なり此石をたてまつらんとのたまひてみずいじんとねりしてとりにつかはすいくばくもなくてもてきぬこの石きゝしよりはみるはまされりこれをただにたてまつらばすゞろなるべしとて人々に歌よませ給ふ右のむまのかみなりける人のをなんあをき苔をきざみて蒔絵のかたにこの歌をつけてたてまつりける

あかねどもいはにぞかふる色見えぬ心をみせんよしのなければ

となんよめりける

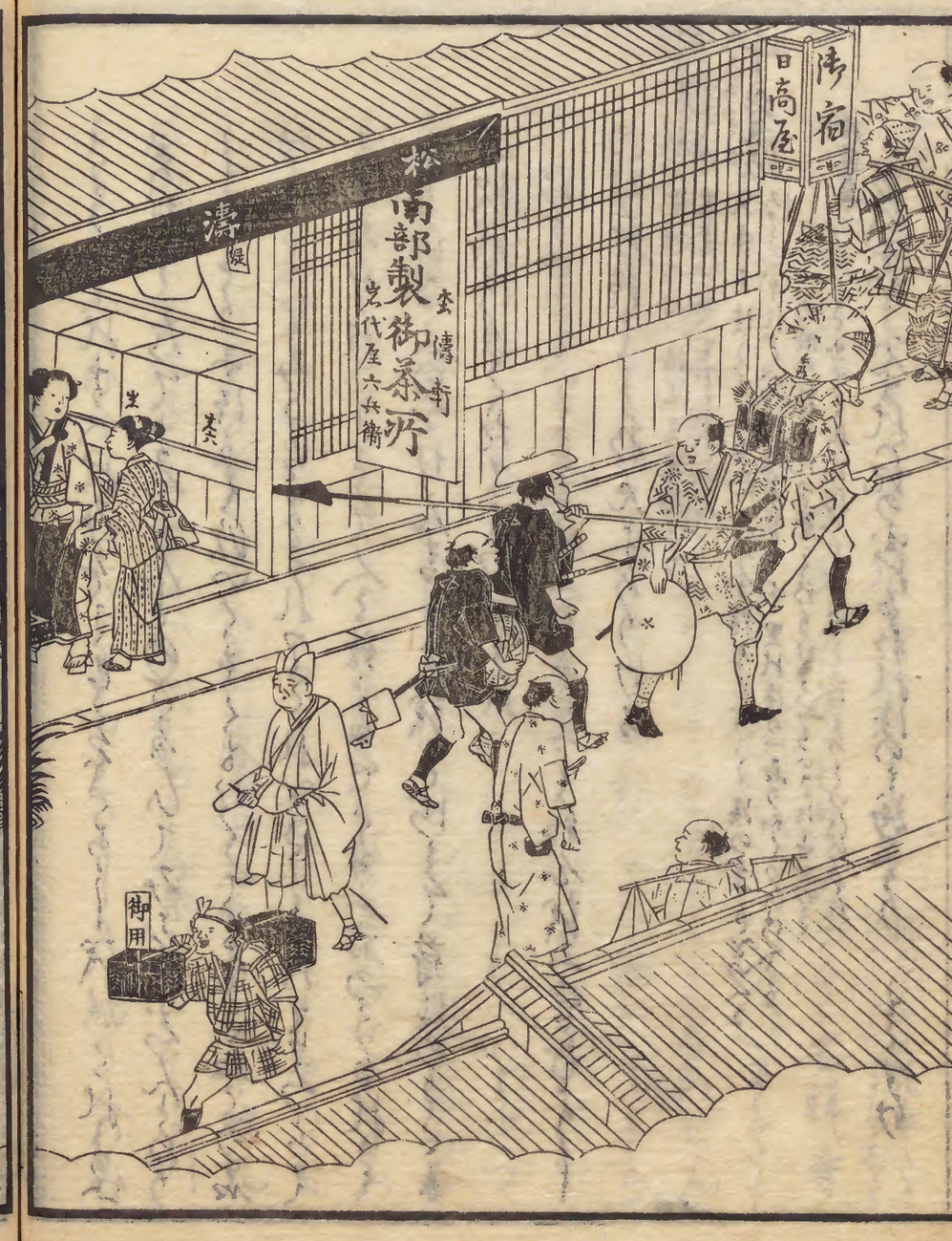
目津崎（めづさき） 牟村の坤海上に突出たり 其名を大もどりといふ

千尋濱（ちひろのはま） 又千色濱ともかきて今はかくいひて濱の広さをいへるなるべけれどいつの頃よりてか千里濱の一名のかくいひ傳へたり 為明の紀伊名紀の守にて作りける時ちいさき子といひて きく出てられいの如くといひふるされしとのいひ傳へたれば

拾遺集

万代をかぞへんものは紀の国の千尋の濱のまさごなりけり　もとすけ

南部
驛
松
濤
軒
岩
通櫃


日高屋
宿
松
濤
南部製御茶所
玄濤軒
岩代屋六兵衛
御用

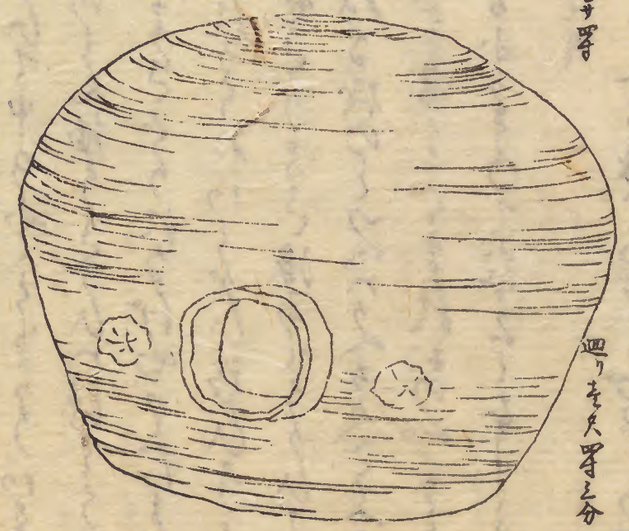
御所原 千里渡ヨリ行テ約 文化行ヒ人
長秋記云
長兼三年二月四日甲申巳時於千里有畫養事

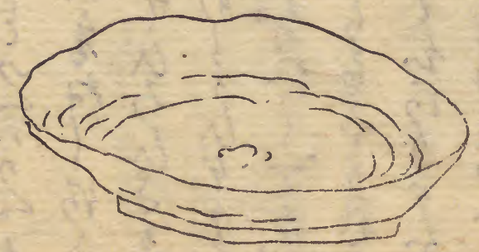
○南限川 山内村と紀伊兼村との堺と流れて往き
橋を架し大水の時は船渡す 中略 二里南北の間小し
○南新驛 市街をなせるとなり
南乃村ヨリ浦ヲ渡ル 文明元年北条氏綱
○湯殿寺 文明元年北条氏綱
三渦王子祠 北乃村ヨリ行テ古乃麦ヒテ
當社今ハ荒廢スルヨリ
御幸記云
次参三鍋王子自是入畫養所食了参御牙之間御幸巳出御
自此宿牙御布施以忠弘送進
之 緒六疋 綿百五十両 人三匹
安楽寺 往シテ七堂伽藍ヲ地ヲ
文永十年ヨリ石塔婆建
拾梨御造立比丘尼持運 文永十年十二月日
三名新浦 南新御の海浦なり万葉集
奉主
寄居子

みなべ潟 浦ヨリ人のみやまよりゆるよりひ

ぬ同じくもろともみまうでゆくしとつくへる人
ゆくひて申ものこころもとつくへ
うけんはるくひは法ふれまとてひろひる貝を
まはさぐりたるげやアたまぶもれわうひそまる
あれうれいうぶひ浪ひろうてかるれうとるげお
てせうまうまう浪あうひて打よせらるとうれこの
入ぬる海のつくへ人くる人こみる日とこ行りかて
つくを居をくまれおのづうとつくへ浦の浦ゆくいら
ふるふうこてたうとあしくつくへる人中く
あうて
もの草浪ふうひうづぐもいやはつくをかけて
いかぬくを
みを敷れ海ふきよ浪ふぬを敷れるを石をもくほぐしるん

芝村安養寺境内より近年
掘出し瓦器及勾玉の圖





ゑずいひてくちねさらんは京みてしかへは唐をおさつれ
袖のしづくふれば河ねゆかしや後瀬の山すなどいひける
たりね

哥枕名寄
浦人や浦つたひて紀の海にたまのかくれにかよふらむ　大僧正宗信

家集
淡路より淡路へ入るとて三名部浦にて
をきつねし笙はみるまの浦に出て立れ神にさそふらむ　令綱

異事

去る天明年中南部郷或商家の下婢名を松と云ふ夜ふけて後子時ばかり家
を出ていづくともなく行方志れず家人大に驚きてさがせどもみえず虚空にて
かの下婢の声有りて志きりに法華の名を唱へ聞けるに人と呼ぶ声しけれども此女
怪しく人々も皆あやしがりてかやうにおもひながら其の声
末にかゝり西にゆきて南に聞えて聞ゆる事ありて志かし驚き遂にやうやく此か
光にゆづりをえ渡せば朝ほど近く枚町を過て此後下女がのべる所を見るに
かの下婢ならめと小社にきたりし志つかりけのきて御るにひとこゝにて
なりされど衣服も皆より上のかたていさゝか濡もれ不ることもなし
こゝにれさる或人にいと何やしとおもひながら火をてらして洗ひける
ひつきてくりその夜を毎日平日のごとくにて更にかはれることもなし
むかりとを出たる事いかにしても思ひさらし心をとめて寝ぬていらんとて
よりいでて法人時至うひのもとて自ら鶏の鳴くを追ふと云ひしが後々
何ともおかしくさりとしいへりまさり
親しく人何をくいひ侍べしと

道祖神の事　多くの読今得こそ

天王寺僧道公誦法華救道祖語第卅四

今昔天王寺に住む僧有けり名をば道公と云ふ年来法花
経を読誦して仏の道を行ひけり常に熊野に詣て安居
を勤む而るに熊野より出て本寺に返る間紀伊の国の
美奈部の郷の海辺を行く程に日暮ぬれば其に大なる
樹の本に宿ぬ夜半許の程に馬に乗れる人二三十騎許来
て此樹の辺に来ぬ何なる人ならむと思ふ程に一の人云く樹の
本の翁は候ふかと此樹の下に答て云く翁候ふと道公此れを
聞て驚き怪て此樹の本に人の有けるかと思ふに亦馬に乗
れる人の云く速に罷出て御共に候へと亦樹の本に云く
今夜は不可参ず其の故は駒の足折損じて乗るに不能ず
明日駒の足を繕ひ亦他の馬をも求て可参き也年老て
行歩に不叶ずと馬に乗れる人々此れを聞て皆打ち過ぬと聞ゆ

国立公文書館
National Archives of Japan

く夜明ぬるこゝ道元山東と拾く性こゝ忘まて樹れ車と巳
てこゝる小悪く死一只道祖神の形と造こゝるこゝて其形
を書く拾て多れを弥陀と云也男れ形のこゝろく
女れ形い死一前く拾こゝ書こゝる絵馬こゝて是れ不破を
たゝこ道元此を見こゝ拾るへ此道祖の云けるもけてと
思こゝ孫よ寄矣小思こゝ其絵馬れ是の小の破こゝれを
糸と以こゝ縛て車れ小こゝ繋つ道元此こゝと今拾古く見
んとこゝく甚日前こゝ尚樹の車小こゝて拾ま付こゝ拾ま れ
ぬく多れ馬こゝ為れる人来ぬ道祖も亦馬こゝ乗て出て芸
こゝ行ぬ嬢こゝ拾る行こゝ道祖こゝりぬこゝ行こゝ年老こゝ
子翁来こゝて作人と不知道元小向て拾して云こゝ至人の
吹白れ駄の乗れ繋治こゝ行へこゝる拾て翁れのこゝ乗れ勢
こゝ此れ恩雅拾こゝ乗こゝ樹の下れ道祖此も也此乃

多れ馬こゝ乗こゝて人へ行渡神小立次小れ問れ巳こゝ時
こゝ拾次翁と以て前後こゝ拾こゝ不者奉来小答と以て打
ち云と以て罵る此の者実小雅法こゝ拾れ今れの下劣の
神祇と弁て速こゝ上品れ功徳れ身と潜んと思こゝ其こゝ至人
れ御力小可振こゝ道元答こゝ宣こゝ小妙也と云へこゝ
此れ函力こゝ不及と道祖小云こゝ至人れの樹下こゝ今二日前て
法花経れ云こゝ拾こゝ小れ法花の力小法て忽こゝ
苦れ身と弁て楽れ小こゝ拾こゝ云て撞消つ拾こゝ失こゝ云
道祖の云小道元こゝ之日こゝ拾其の小こゝ小こゝ法花
弥陀浦次東四日小前義来れて道元と礼こゝて云こゝ礼
人の意悪こゝ法て今流こゝ人の身と弁て来き身と潜んと以
以沿補陀落こゝ生て観音眷属と拾て弁れ位こゝ累らむ
此こゝ偏こゝ法花を学こゝ学こゝる れ也至人若こゝ其の虚実と知む

と思ひたゞ茅を以て校を結て社を造て新宮
像と名くゝ祠上に浮て其作法頗結構と云て擬清つ
根くゝ失ひ其後道を道祖の宮に移て此の道
祖神の像等をくゝ祠邊に移し上て放ち置ぶ
其時に風不吉波不動して茅社前と指して走り去又
道に此紙又くゝ茅社の不見成るもくゝ流れ根して百姓
又其の郷にくゝ老たる人多て其の人れ多く此村の中に社
并に祠とゝめて光を放て照し輝て音樂を奏して前と指
てをゝ和び昇ねしに人けを道に此のゝを伺く信じて幸もく
思くゝ法花神と崇まるる不思議と道ゞ流るゝと雖て人皆
来ひけるとかん信ぜられと也

紙世寺 右村に有て法花宗西山派寺院也代元年業祈四辺所等ホ未も多く繁今も伝くれ

一宮権現社 東市左村に有て西市左村に御鎮座宮と和結せられ歌
ゝ前書の所に人文以八と上様の様れ有

紙薗御霊宮 西市左村ホ二ケ村に有て左村十人ケ村の氏
神と為て崇ゝ大社なり 境内もいと広く大社なり

当社ゝ系紀に御霊宮より和結せ上しゝ伝ゝ人 御霊
御霊宮と云ゝ祇園祭神と和結せしゝ紙園なる
御霊宮と中に又御霊と中に
下向せし体ホと御鎮しゝ伝ゝ今も御遷座して其ホ
ゝ系式紙ゝ法華宗に成ゝ又的道四年に様れ様れと
始しして文安ホ永保年に再興れ様れ年に有ゝ
なり

領主愛洲兵部大輔源義後 西谷文 阿閦梨善祐 権大僧都慶祐

造栄 南部御庄紙薗御霊宮二御社 明徳三年壬戌上月廿一日 太郎丸 貞宗 目藤原 宗貞 栗田佐 霞大工正近 貞永 三郎 大夫

勧進僧東福門葉長貞上座

貯遺氏城跡 西市左村ホ二ケ村に有て一ハ紙瀬山一ハ幟山と云て辺氏ハ弟山
氏の文書ゝ聖辺源ゝ辺園御霊社永正の様れ

南部東本荘滝谷

国立公文書館
National Archives of Japan

祇園御霊宮

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

此辺小野氏の辺弥右衛門と云人也古老伝聞の事共多し

瓜溪 西本元村の南に町許にて溪の口ふさがる溪

産物奇石 瓜溪と産物奇石と二ヵ所谷と二ヵ所谷と二ヵ所谷と

溪琴山房詩

林谷山人余舊交也乙未冬日邂逅浪華市中携歸南紀富浦之古碧樓者數月今茲二月將歸東都余蠟丸溪石數枚且係以七言長句

短内保定

山人不談上古事雲飛煙滅五千年山人不談今時事浮名世利太紛然醉鄉之外更何有一條只餘山水緣天下山水無不遊青牛白鹿見羣仙日暮長風吹巾幘飄飄神得萬峰碧行李蕭然殊不俗一擔清玩竹與石竹兄石弟共無恙喚作山水同遊客熊城秋雨馬閑風幾處羇愁對渠酌我是十年舊相知旗亭重遇雨情適千山萬水相携歸淺浦春風四柳色半瀟濁酒數杯往愧無玉斝照瑤席上贈以太溪石數拳山人愛石如趙璧謝云從此去開左右排竹築園宅笑指芙蓉跨歸鞍別後風流可得聞他時對石若相憶彷彿七十二峰雲

南部川郷 八ヶ村 天すれ子地なり川上流にて南部川の上流にて溪谷を通る

上流にて熊村と称す

南部川源名之内れ山峰より發し狗井川水之川神野川等東より来る野川市井川の二流小より来る流水此小溪合して熊と称す叢を穿ちて走奔ち其響雷霆れ如くなれば名づけ奇観といつべし

阿和惣大明神社 同村にて紀伊国名所図会に見えし者

天寶明神社 名之内村の小れ山峰にて南面年寄彦秋作氏田四反より

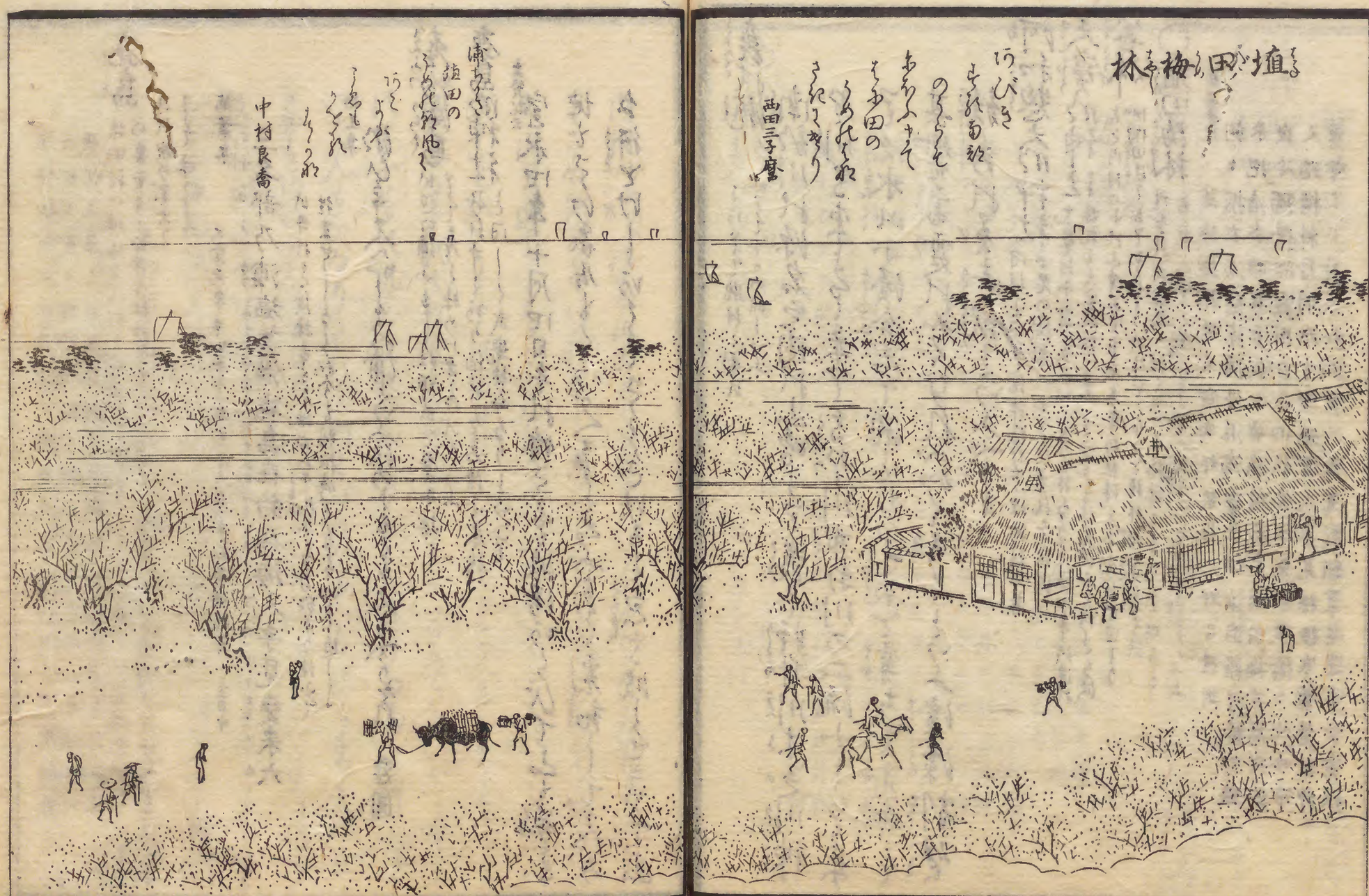
墓作 名之内村の小れ山峰にて南面年寄彦秋作氏田四反より

○植田梅林 往昔れ大石及一村ありく実ハ枝千比にて

松廬遺稿

朝々振衣浴蘭蓀猶侵混濁塵世煩誰識羅浮林下蝶永抱清香睡黄昏我亦曾摘瓊英去再寄梅花萬樹邨夜冷獨捲皓霞卧自是幽夢屬永竟春風徐々吹吟笻又踏横斜月明痕十里瑤雲人不見縹緲寒馨薫乾坤簫聲不下飛天外洞霄只看鸞影翻羣真遥挙素霓袂

松本 宿南部 観梅 野呂隆訓



国立公文書館
National Archives of Japan

来變歳寒孤心存霏々瑤屑滅衣落已酔仙黎萬斛樽
芳緑不盡互披襟甫信入間白衣尊便頽百年酒醒日
倶朝玉皇上崑崙為斟一杯竊相祝枝間青鳥矢勿謾

鹿島 塩田村の坤海上八町ばかりにあり寺影黒くして岩上に樹樹茂りて
の東をふりし明神の社ありて人まうでず毎年八九月の頃鶴ども多くこれ多し此
済氣様の奥大くして求よし

萬葉集　大宝元年辛丑冬十月太上天皇幸紀伊國時哥十三首中
三名部乃浦塩莫満鹿島在釣為海人乎見變来六
此哥はむかし此持まゐりて往古は千潮おちて南紀より渡り
往来せしなるらん今も羽根椿よりさりて迦し

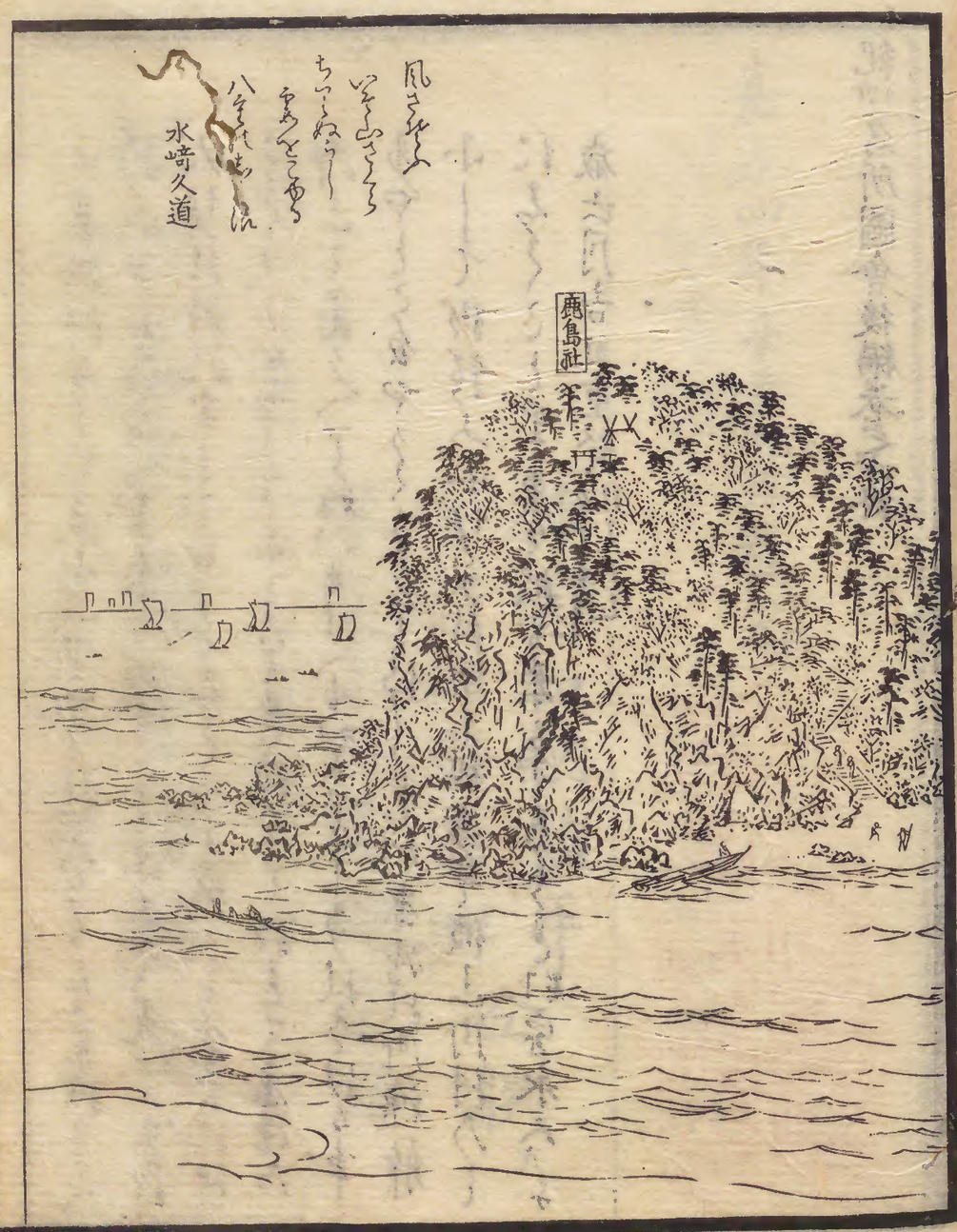
拾玉集　慈圓
にしひろき人かしまは浦といふ浪のよるこそみるべかりけれ

産物海馬　此辺の浦に多し妊婦此を掌に握
りて産すれば安産なりとて人
鹿島明神社　祭神は武甕槌命なりとて在津の康保
重賢記云
宝永四年十月四日午の時さながら波濤たちのびて山を崩
地をさけ居もくつがへるばかりに大地震動して人み
な肝をけしけるにさらにさけるとも息ころ波よせきたりて山

内村 南部川の 右小巻 此あたりなる男女此わ
ざをきて海面よりたちまちなる浪たち来りて
里迯よ逃よと声々にさけびてよるもれもとにかく
汝山の方へにげければ家もおしく人みなおくれし
我家を捨て我の此山へ登り居て若
此道の草の枕に夜四夜たかへてあはれみね
いきんもえなりきれど河より此方へ浪も来ず汝民
家もかやうの事ありけるに
常の波山の方へにげけるに我人の浪のきて
此の海面我人渡し得しに康保の沖より彼御
山をみつとつ一も浪のたちきさ此波立来る中
さく向く身をみて妙なり光るける物の見けりとバかや
しと聞もちれ々汝とえりう見えざりけるどうんける

南部鹿嶌神社

然代繁里



国立公文書館
National Archives of Japan

小其波神あり大小二つ小なれ大なる来れるを
約小きなる浦へ寄来り彼大きなる小きなる先に
入れば波れ出るなり
ゆるゆるとおりゆるゆるとおりよりて其波をもれて廉潔乃
神山を先々にまぬいあり
あやとこ見やくくうとなり先に廉潔れ神神鉾
小しして弱鉾へ小れ
にきくこと星あり波も来らざりしと野宮永久氏子
歳六月吉日重賢本出家修仕て考む

紀伊名所圖會後編巻之六終

嘉永四年辛亥四月發兌

柿園加納諸平 仝撰
雀所神野易興
琴泉小野廣隆畫圖

紀伊名所圖會後編 近刻

牟婁郡之部

發行書林

江戸　須原屋茂兵衛
大坂　河内屋喜兵衛
同　河内屋太助

紀伊書肆

帶屋伊兵衛梓

紀四編六十六

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan